

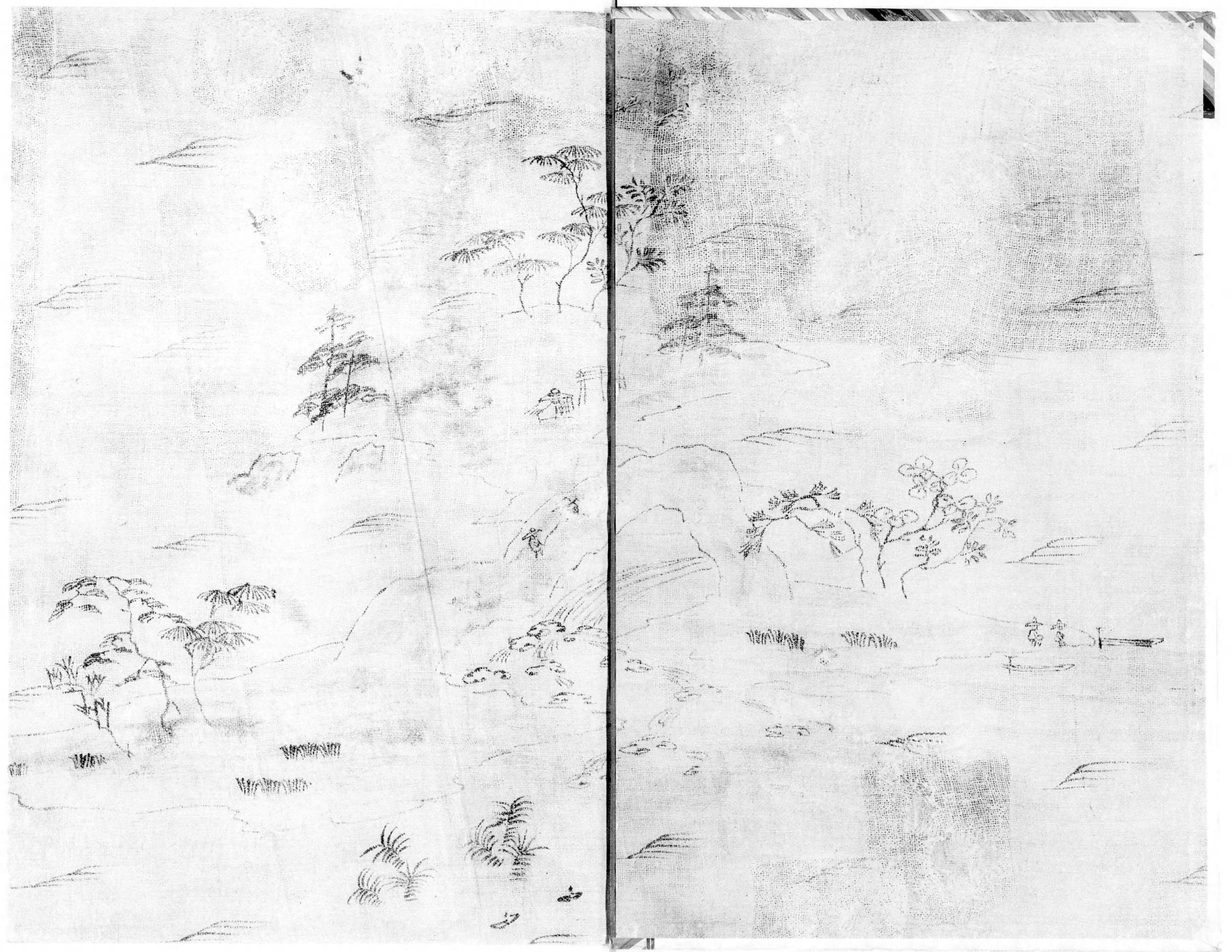
正倉院御物図録
十五



E709.2
Ko49
(15)②

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始
→



正倉院御物圖錄 第十五輯

南倉納物

目次

第十四	第十三	第十二	第十一	第十九	第八	第七	第六	第五	第四	第三	第二	第一
圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖	圖
赤漆	同	同	履	同	假	衲	同	同	璫	同	同	紫檀
櫬木												鳥毛貼
胡床												成文書
(正面、背面)												屏風
												架

E709.2
Ko49
(15)



第四十八圖

黑漆密陀繪唐檳

(鳥草形)

第四十九圖

黑漆密陀繪唐檳

(彪鳥雲花形)

第五十圖

同上細部

第五十一圖

同上細部

第五十二圖

同上細部

第五十三圖

同上細部

第五十四圖

同上細部

第五十五圖

同上細部

第五十六圖

同上細部

第五十七圖

同上細部

第五十八圖

同上細部

第五十九圖

同上細部

第六十圖

同上細部

第六十一圖

同上細部

第六十二圖

同上細部

第六十三圖

同上細部

第六十四圖

同上細部

第六十五圖

同上細部

第一圖 染檀小架

(縮寫約三分之二)

總高	四六三種	笠木長	三六〇種	貫長	一四四種
床高	四二種	床橫	二九三種	床堅	一三二種

瑠璃木畫の床上に牙莊鳥居形の小架を裝置せるもので、其の用途は未だ詳でないが、典雅なる姿と精緻なる技巧とは夙に識者の注目するところである。柱貫笠木は何れも断面四花形の染檀材を用ひ、之に白牙の彫刻をかぎり且つ二雙の牙肘を出さしめ、床は長六角形に作り木畫を飾り白牙装の床脚をつけ、軽快にして尙安定感を失はないやう工夫のあとを見る。



水手の事は、お出ででござります。
御手洗水鏡及び小物等を貯む。腰刀の刀身の安定期を成む。丁
目で二枚のアラビア字の面を「メ」。頭部は六角形。首と木座又
は瀬戸内海等の漆器等が置かれる。又身内半身等陳列する。
又お風呂桶等が置けられる。昔身近の島嶼地
其の風流の外は、雅うござる。美觀の上、美術の上、古物
相與水器の用意の事は、直に其の小要を美術があるものだ。

東洋　唐三絃　雅樂　二八三絃　東洋　(三三絃)
樂器　四大三絃　豊水鏡　二十六絃　青瓦　一段油瓶

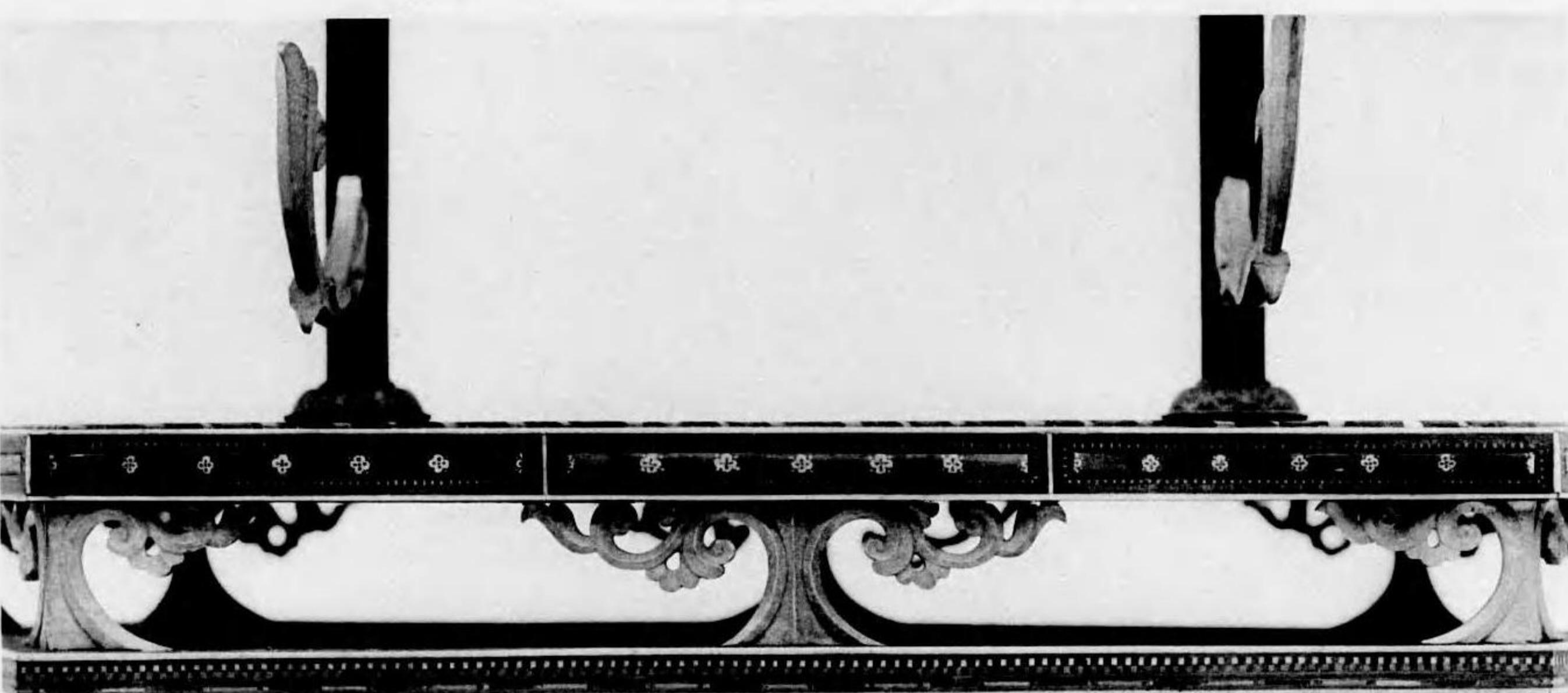
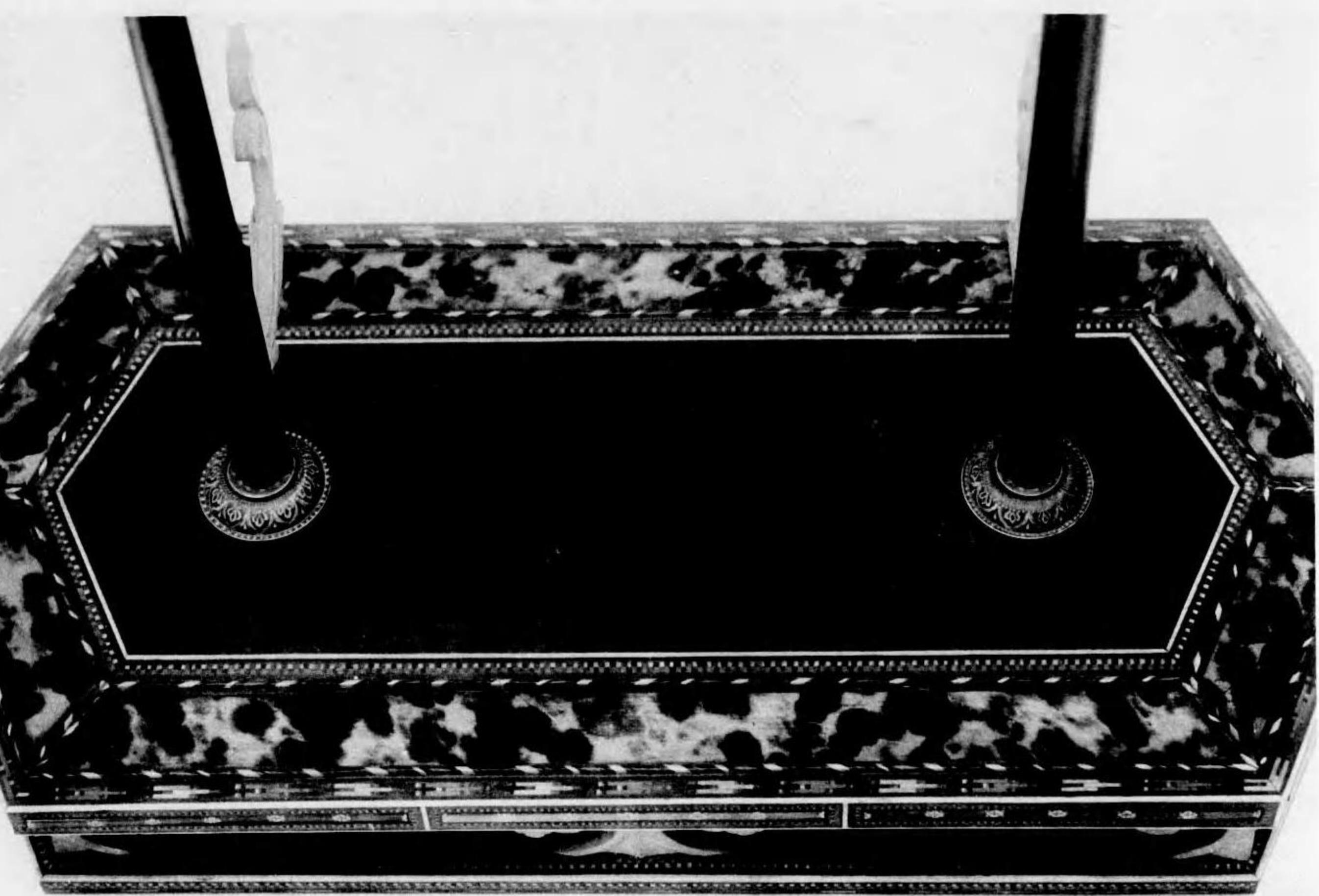
(原作)

第一圖　樂　器　小　集

第二圖 紫檀小架細部

(原寸大)

前掲紫檀小架の床の部分をほど原寸大に出す。上圖は其の上面、下圖は側面を示す。柱脚の礎盤は共に紺牙を撥鏤して逆蓮を顯はしたものであるが、其の瓣を一つは十瓣他を十一瓣に作るは當代技法の自由さを思ふに足る。床の天板は紫檀の二枚接ぎにして周圍には箔押珊瑚張の梓檜を繞らし界には木畫を用ふ。而して其の側面には紺牙又黃牙に小花文を撥鏤するものを中心にして木畫を嵌め、臺輪にも同様木畫を飾り、其の間唐草を透彫りせる白牙の束八個を立てゝ之を支ふ。東の白牙透明の技巧は特に鮮である。



第二圖 紫金小漆櫃

一九一〇

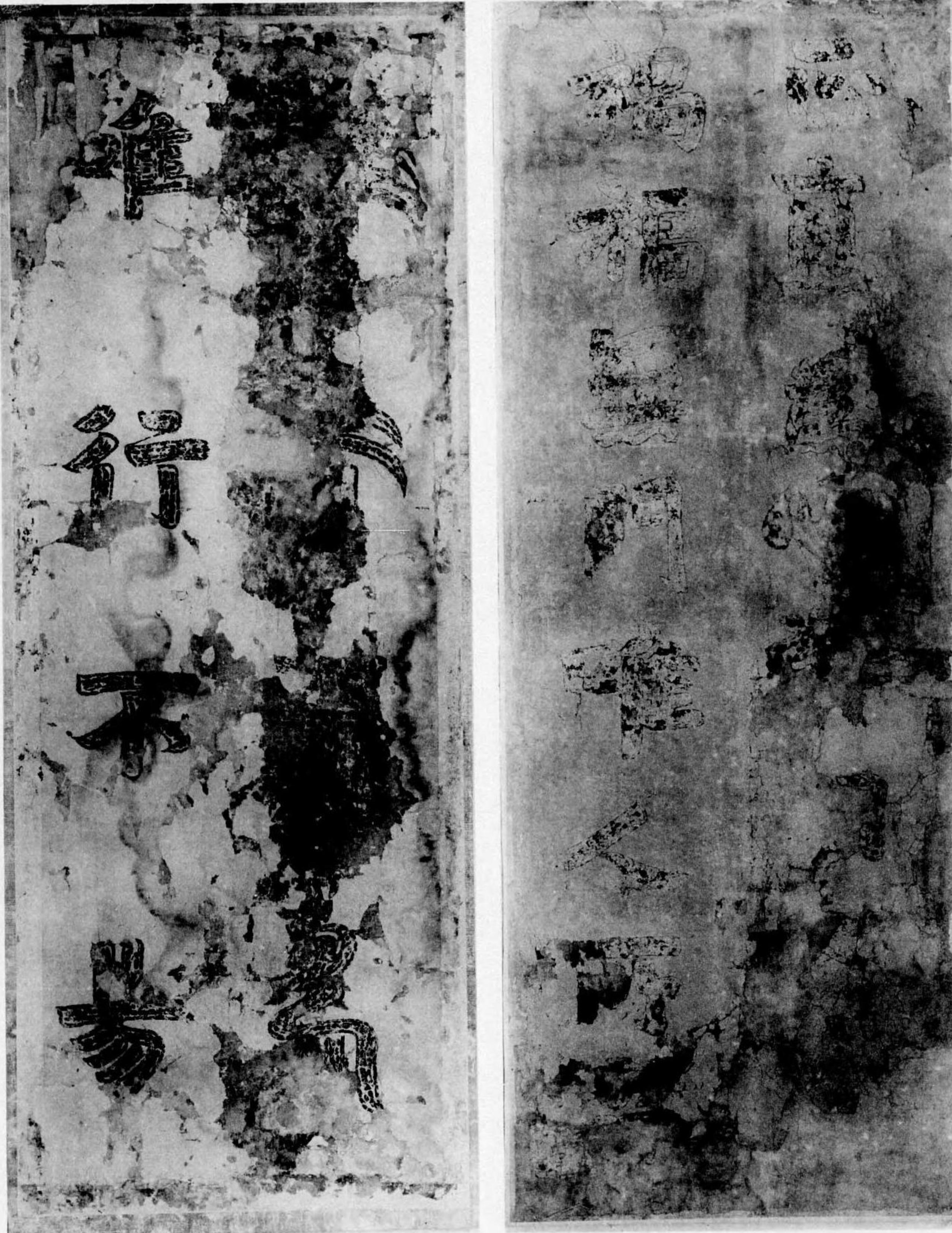
の事は御存じの方々に於て、身の内を嘗めお過りの如様
お會ひと同様不思議だ。お前様何ぞお詫びせり。且宋
太祖皇帝は本多子の御恩を承りかず乎。アラ不思議だ。
春哥も驚きと涙と汗水を以て。頭にて涙と汗滴がお顔
君の文政天皇御の「御歌」にて「御歌は悲喜劇也御歌也
十駕也」十一萬一千字の御歌力無能を嘆仰す。思ひと想ひ
驚嘆すア驚歎す頃の「御歌」。要は幾つ一歌の
其の立脚、才思有無の如きを考へて。お詫びの御禮は致り難む
御高名御小景御の詰合を以て居る次第です。上御其

第三圖 烏毛貼成文書屏風

(縮寫約五分ノ一)

各高 一五〇・〇 檻 帯六〇・〇 檻

鳥毛貼成文書屏風は北倉納物中に十二扇あり、此の二扇も其の製作は彼に全く同じ。殊に向つて右圖の「正直爲心、神明所祐 義福無門唯人所召」と讀まるものは、北倉納物（第二輯第五十四圖參照）に殆んど同様なものあり、以つて當時同一文書の屏風の多數製作せられたるを知る。只彼に比べて修補少く且つ「無」字に缺割無きは注目するに足る。左圖の一扇は「唯行不易」の四字を篆書と楷書と二行にあらはしたもので、北倉中にも其の類を見ないが、彼の篆書屏風に篆書楷書を毎字反覆せるとの、計畫上の共通性あるは興味多い事である。



第三圖 亂世漢與文清洞風

前か後かは定めず。其名は云々。其事は云々。其時は云々。
とあります。正當中計は其の如きです。身の迷惑氣氛では有り
ません。或國が、既に、當時不興、西國の政治的動向等を、計り得
せるは城さ。其跡が黒々、其跡を守護するは、一處、セヨ貴族等を守護す。
然ふも眞理のまま、心切に、當時國、太君少卿等の貴族等を守護す。
世人眞君（人間ははるひと）其食指聲（是ニ皆我耳ノ所間矣他）
行者を、もと、國を、守護す。其之を、下家相（王家相）の如く保候、其諸里門
昌子（昌子文官相）相對、其國守候中計十二國也。故に、二國ノ兵の侵入

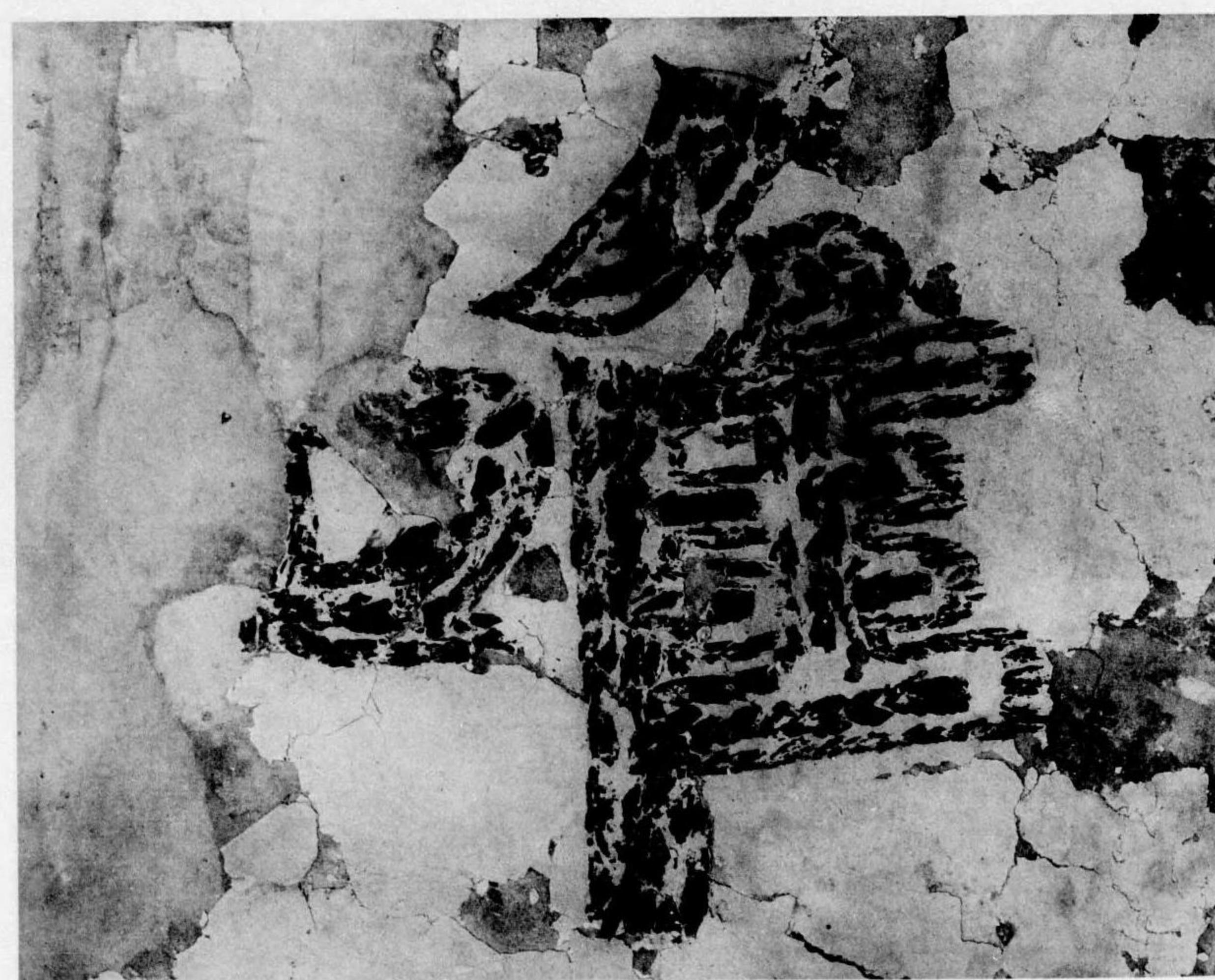
老高（老高）の勢、諸（諸）の如く

第四圖 烏毛貼成文書屏風細部

(原寸大)

上圖は「禍福無門唯人所召」の「禍」の一宇を、
下圖は「唯行不易」の楷書「唯」の一宇を、それ
く原寸大に示す。其の製作を見るに何れも白
紙に地色を厚く塗り、薄墨にて文字の輪廓を双
鈎體に書き、これに鳥毛を筆勢に従つて二列又
三列に貼つて作る。但し前者は胡粉地に山鳥の
羽根を貼り、後者は黄土地に雄羽根を用ひたも
のゝ様である。

四
卷之三
便母三事不一財物以資生此其無能者也
三義三胡之子皆是也此子皆多力而有能者也
善體子音者也此子皆能者也此子皆能者也
獨子能者也此子皆能者也此子皆能者也
人子能者也此子皆能者也此子皆能者也
子國士子能者也此子皆能者也此子皆能者也
五
卷之四
便母三事不一財物以資生此其無能者也



第五圖 瑞 杖

(縮寫約五分ノ一)

〔竹形杖〕 全長一二二五釐 徑一八釐 橫木長三二〇釐
〔八角杖〕 全長二三三五釐 徑一九釐 橫木長二四五釐

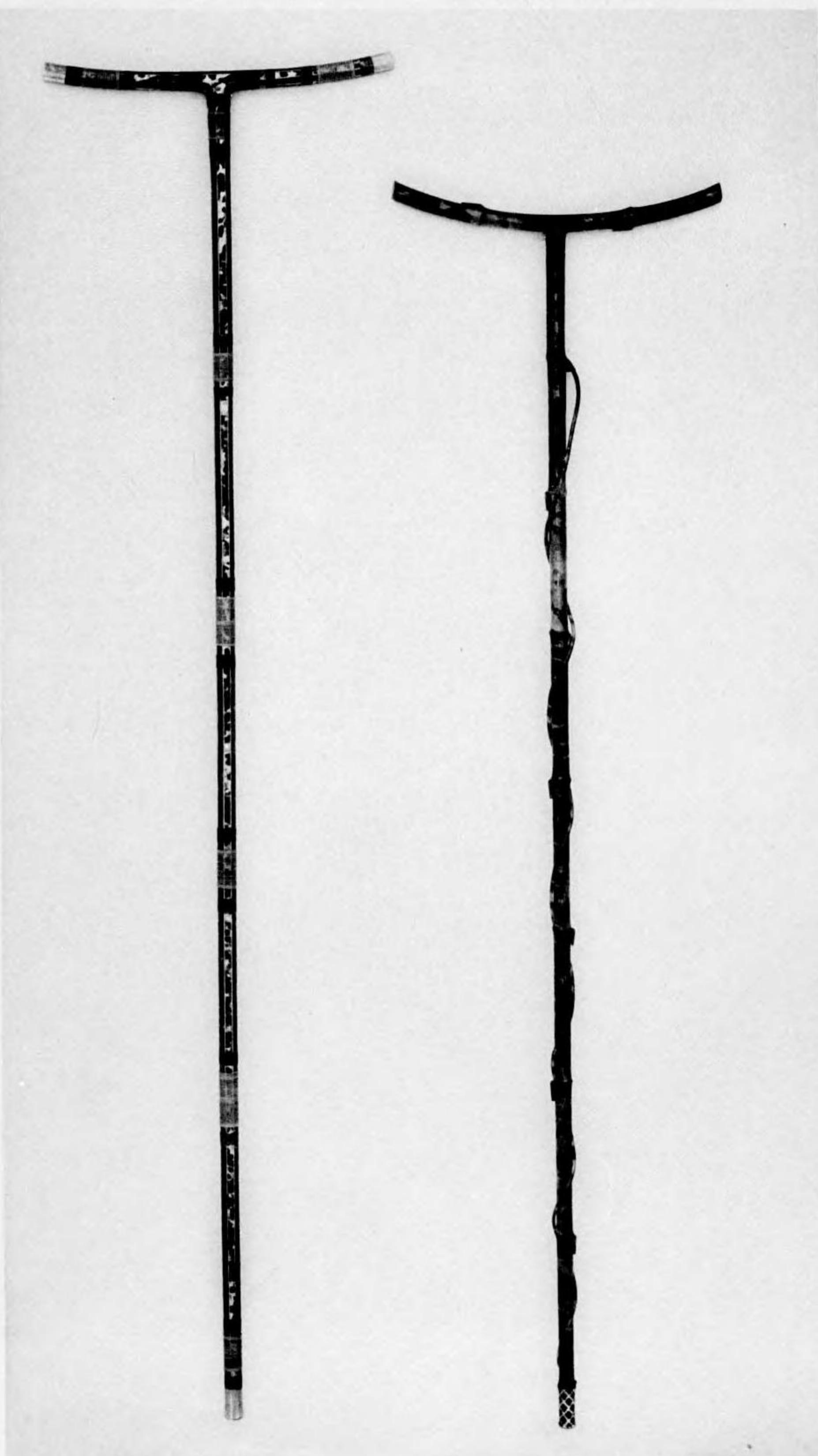
竹形杖は珊瑚を曲げて竹管に作り、これを八段に接合して八節となし、上方三節の横木を加へ、且つ各節竹枝を殖えて、内の一枝を延して杖に纏はしたもの、八角杖は臺木を八角に作り、之に金箔と縁彩とを隔面に施し珊瑚を被せ、簾と櫛との段巻きをなしたもので、彼は意匠の妙に於いて優れ、これは絢爛の美に於いてまさる。

ト御子ア源氏、ニヨク御事の美ノ氣リアモテ
シ御子の御意ニモナシナガル。御好意ニモナガ
ルニ全然モ難堪ミテ御面お達メ御心ア御子
封口御有ル事モ、人情好れ茶木モハ御才具モ
ヘ、且ハ茶道御愛樂多シ、由ルニ致マ御了
封口御合リハ前も之シ、主水ニ通ハ茶木茶道
音無好力既徳モ御下ア皆君共曉ム。ト御子ハ

〔八音切〕 委員一二正議 第二式議 茶木茶三副官議

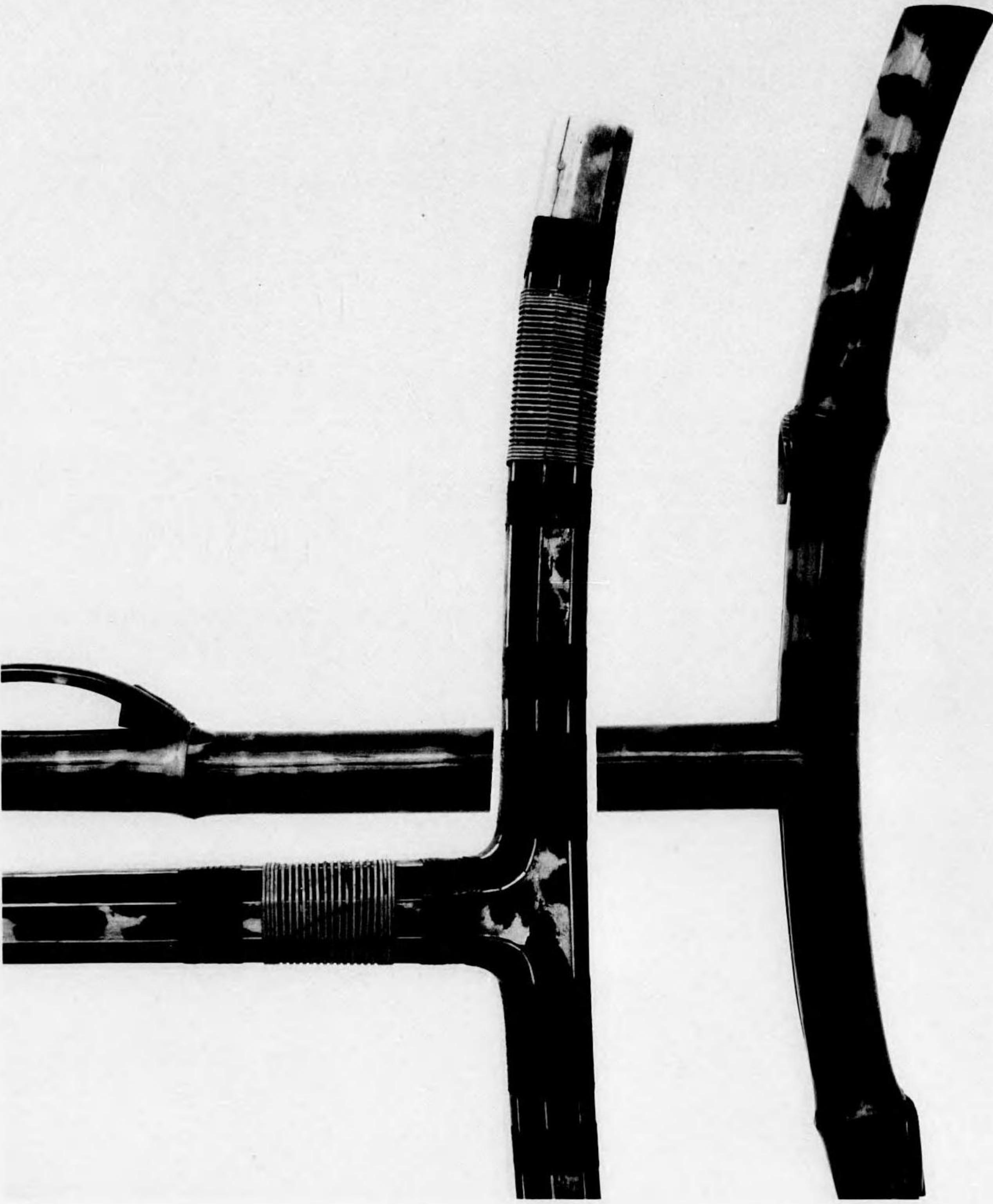
〔音韻切〕 委員一二正議 第二式議 茶木茶三副官議

奉 章 國 沢 对



第六圖 球埴杖細部 其ノ一

杖頭の部分を實大に示す。竹
形杖の横木は全部用焉に作り、
兩端の小口にまで尚埴堪を張る
も八角杖は横木の端に白牙を飾
り枝には白牙の界を作り、且つ
所々に藤巻きと樺巻とを施す。
八角杖の中央白き班の面は金箔
地垣埴張の部分、それに隣る暗
色の面は緑下地垣埴張のところ、
又段綱きの白く見えるは藤、稍
々黒きは樺綱きの部分である。



歩脚でお船解きの船張である。
お見舞を心白く風ふるひ聲。舟
船心浦口は可船頭御事立と云ふ。
御旗候船の船舟。舟身の間の御
八舟身の中身は御の御舟水通
舟主に御船を上船坐と坐と。
舟身の白下の車子舟。舟の
舟人舟身は御水の船舟を下船
舟頭の舟身は御船を下船
舟頭の舟身は御船を下船

舟身の舟身は御船を下船

第七圖 琙 璞 杖 細 部 共ノ二

(原寸大)

枝の中程と其の末端石突きの部分とを出す。
竹形杖に於いて各節環璣の合せ目を交互にかさ
ねてゐると、竹枝を各節植込みしてゐる事と
は先づ注目すべく、又石突きに撥鏤の紺牙を用
ひ、而も其の撥鏤が普通の撥鏤と異り文様の周
を削つて花文を浮彫してゐるのも珍らしい。八
角杖の方は石突きに八角の白牙を嵌め所々簾と
樁との段巻きをなすが、其の技法はすべて杖頭
部のそれの反復である。

新はうすに御殿で奉事
朝は夕暮連ひテ不休の間は御殿の主の御用
侍女御内侍御使等が此處に居て是を御内侍御
子院にて御内侍御使等が此處に居て是を御内侍御
十面手の御内侍御使等が此處に居て是を御内侍御
日未い書はせん」又云「江戸御内侍御使等を御
はする事ゆゑ、世間を各御内侍御使等云々といふ者
片桐君は御内侍御使等が此處に居て是を御内侍御
若き中無も其の才能音楽の如きを身に付ける

御子嗣　康　穀　森　憲　溫

前文



第八圖 假 斑 竹 杖

(右縮寫約五分ノ一
左原寸大)

全長 一六〇五釐 徑二三釐

四節ある女竹を選んで之に假斑を作り、其の各節には金泥の隈取りを施し、これに簾と樺との段巻きをなし、且つ其の杖頭と石突きとに水精を嵌めたものであるが、簾と樺との段巻きは、各節を中心にして其の上下に於いて殊に繁く作つてゐる様である。

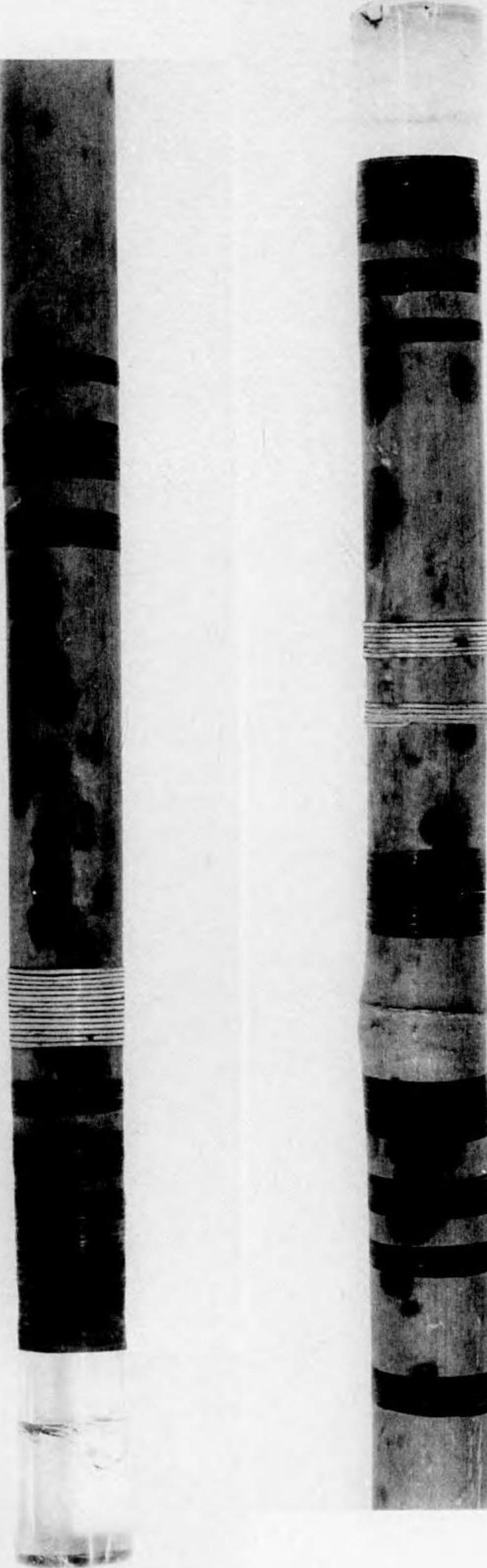
にておもててまふ。

お酒を申せよとおの立ちて候。うれしき事に驚き、お
詫を仰がる。おひさしは、腰を解かぬ事無き。お
のれを思ひておひさしは、思ひの如き事は御要。うれしき事
お酒。お金の御事はお酒。うれしき事無き。

西郷の太音坐顕あらはは御事有り。其ノ

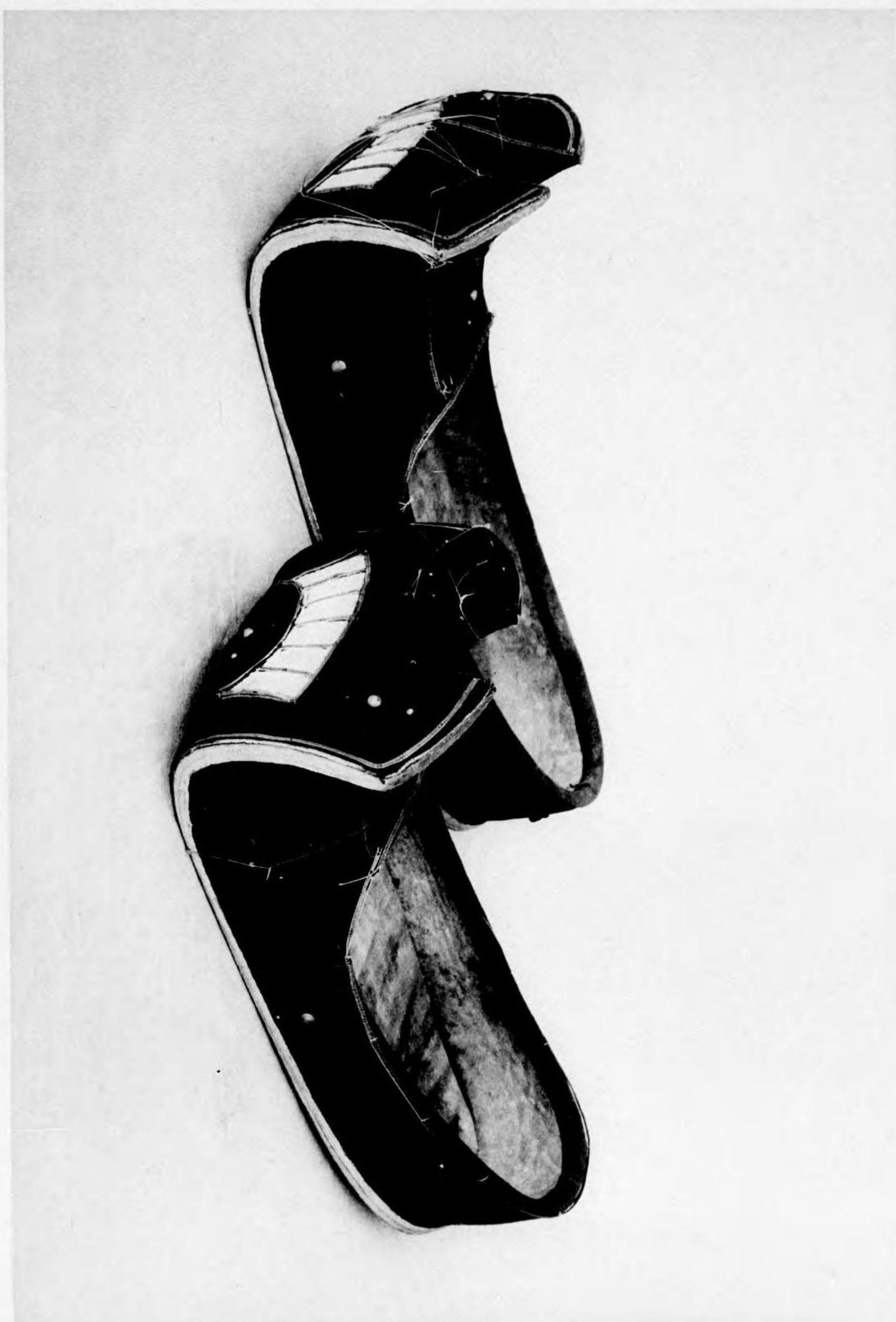
坐長。二十六日正月。第二回。

遊人圖鑑。第三回。



第九圖 祔 御 禮 展 (總約三分之二)

傳へて聖武天皇が大拂開眼會の砌、親しく御服に用ひ給ひし御料となる。爪先の反轉した形は後世の鼻高に類するが、絆の桺皮を表とし白革を裏とする。枚合せ縫ひ、其の縫目に従つて純金線を飾り、所々珠玉を散りばめ、且つ爪先裏に扇形の白皮を貼したもので、莊嚴華麗、げきを覺える。



七

六萬里の御用仕えを以て、その御
事務は口上のみ。御用事務、内
外事、兵士兵事等の風評には甚
く専念せられず。他や御用事務了
事令を置かず。或に御用仕事の事
務をも置かず。御用事務の事務をも
置かず。御用事務の事務をも置かず。
是より御用事務の事務をも置かず。

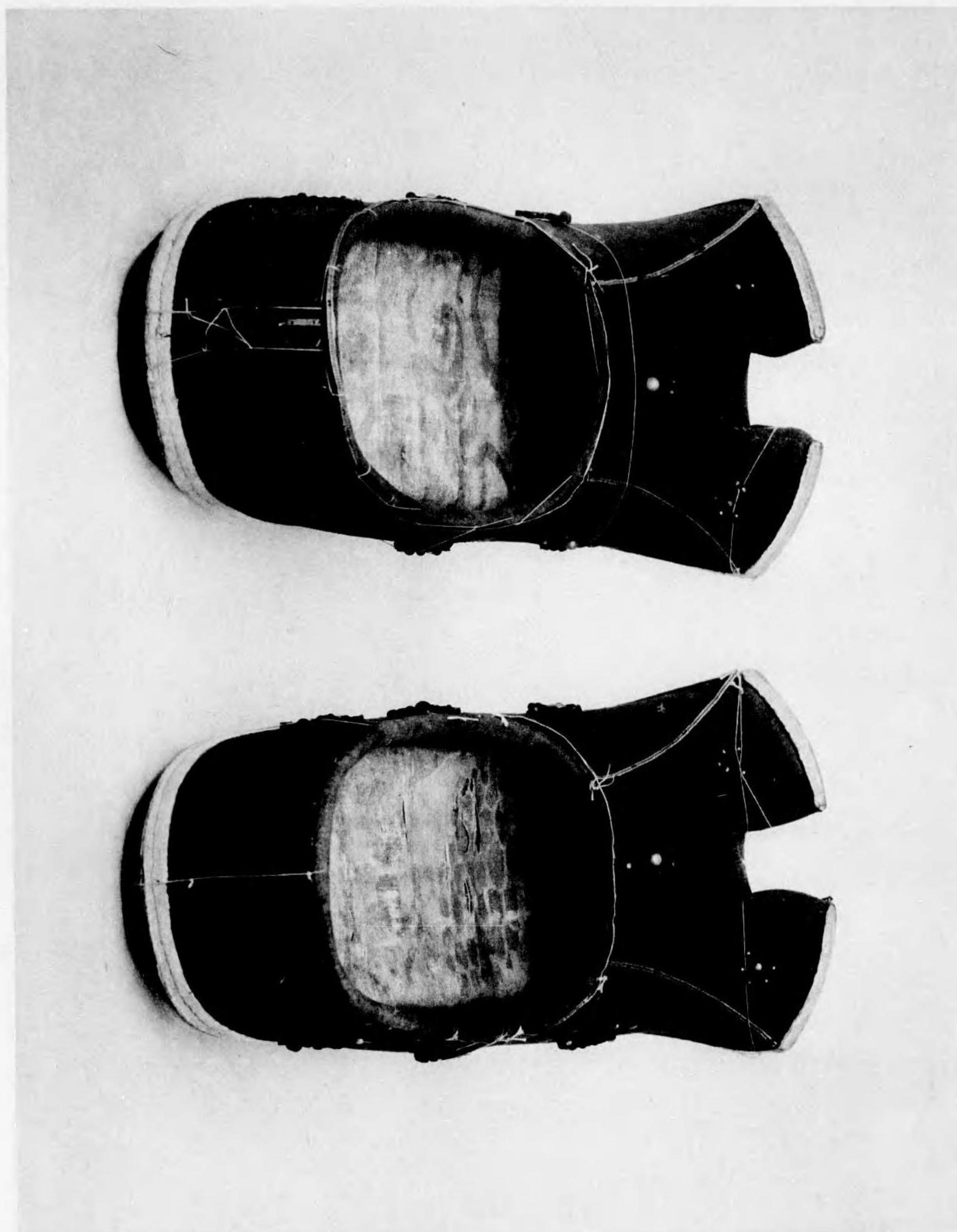
方略卷二十三
中・東洋の本草書・卷一

新式圖書新編

く同形に作られ、各爪先は二つ
に割れ、雖は弧状に澎出し、甲
に繕皮には珠玉の銀臺金具に嵌
められたものが、更に糸にて貼
せられてゐる。銀臺の珠玉は中
央に真珠を嵌めこれを縫つて藍
緑黄白紅等の瑠璃玉を配したもの
のが多い。

腰内部には別に喉を入れる。喉
は長三二・〇、幅約一・〇、極あり、
蘭錐の芯を白布に包み、之に大
形薔薇文白綾を被はしめたもの
の様である。

第十圖 柄御禮冠(總第三分之一)



心靈之樂曲。

你會發現你所愛的歌詞，
就是你所愛的歌者。你所愛
的歌者就是你所愛的歌詞。

這首歌的歌詞有著少許的變

動，但沒有變動。

你所愛的歌詞是歌者所唱的，
你所愛的歌者是歌詞所唱的。
你所愛的歌詞，就是你所愛的歌者。
你所愛的歌者，就是你所愛的歌詞。

你所愛的歌詞，就是你所愛的歌者。

你所愛的歌者，就是你所愛的歌詞。

長二八〇 檻幅八八 檻爪先高一三 檻
南倉納物中殿の現存するもの
凡そ參兩十八隻を算へるが、其
れは何れも略々同形であれば、
今其の二隻を選んで殿の一隻を
示す。

形は大體前掲の柄御禮に似
對しこれは山形に作り、且つそ
るが、前者の爪先が割れたのに
對しこれは山形に作り、且つそ
の爪先裏には黒地に白の唐草文
を描く。又皮も前者の絹皮なる
と異り、黒漆を塗り内面白革を

貼る。

第十圖 殿

(部寫五分之)



附录

此器之形制，其盖合者，似鼎而无足，亦非彝器。其盖未合者，其形如簋，而其腹之深浅，又似彝器。其盖合者，其腹之深浅，又似彝器。其盖合者，其腹之深浅，又似彝器。

此器之形制，其盖合者，似鼎而无足，亦非彝器。其盖未合者，其形如簋，而其腹之深浅，又似彝器。其盖合者，其腹之深浅，又似彝器。

第十二圖 履

(縮寫二分ノ一)

塊長 三〇・〇 棱 幅 八・〇 棱 厚 〇・八 棱

上圖は前掲履の側面、下圖は特に其の塊を示す。上圖に於いて、履の側面の朽ちたる隙より布目の見えるは、芯に麻布の用ひられてゐる事を察するに足る。下圖に示す塊は、今の靴の敷皮に相當するものであるが、當時それに蘭筵を重ね麻布で包んだものを使用してゐた事と、其の表に墨書して使用者の心覺えとしてゐた事とは、古人の生活も想像されて興味深い。

塊の墨書には外に尙「皮」・「太」・「本」・「鳥」・「丁」・「比」・「七」・「丙」・「五」・「乙」・「八」・「土」等の文字がある。



古事記傳の西ノ島ノ八ノ山ノ望み矣
御の御傳の日本一島ノ九ノ山ノ島ノ御傳
人の御傳も思傳もアリテ御傳也
古の御傳也アリテ御傳也の御傳アリテアリテ御傳也
アリテ御傳アリテ御傳也アリテ御傳也アリテ御傳也アリテ御傳也
アリテ御傳アリテ御傳也アリテ御傳也アリテ御傳也アリテ御傳也アリテ御傳也
アリテ御傳アリテ御傳也アリテ御傳也アリテ御傳也アリテ御傳也アリテ御傳也
アリテ御傳アリテ御傳也アリテ御傳也アリテ御傳也アリテ御傳也アリテ御傳也

御傳二〇の傳　御傳二〇の傳

御傳

第十三圖 履

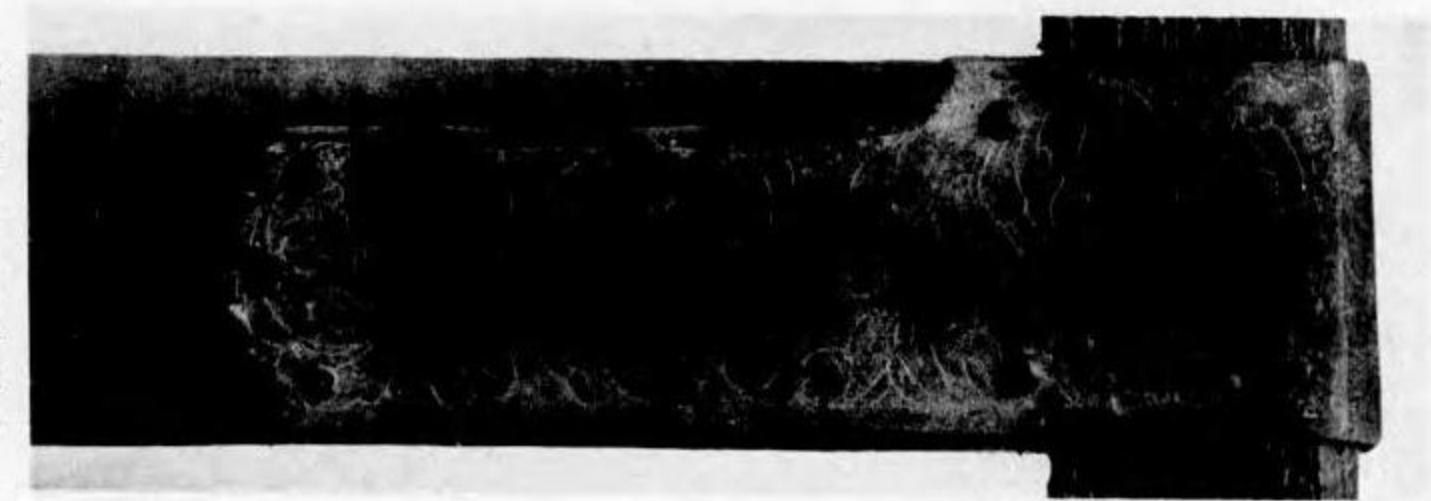
(縮寫二分ノ一)

覗を去つた履の内面と底背とを示す。履底は
反轉せる爪先きまでを厚き一枚皮にて張り、爪
先きと底の周囲には特に黒漆を塗る。甲は黒皮
三枚を縫ひ合せて作り、麻布を芯にして裏に白
革を張り、且つ口縁に覆輪をとつたらしいが、
今覆輪の残るものは無い。尙底内面に黒書して
「丁少、上毛野老万呂、廿七日」、「少、凡人足
廿九日」とある。型の大小と製作者と、製作日
とを記したものと考へられる。

トモロコトナガシマセス
音波引ニシテラセ、即ち大木主事有聲子。是外は
トモロコトナガシマセス。即ち大木主事有聲子。
トモロコトナガシマセス。即ち大木主事有聲子。
トモロコトナガシマセス。即ち大木主事有聲子。
トモロコトナガシマセス。即ち大木主事有聲子。



第十二圖



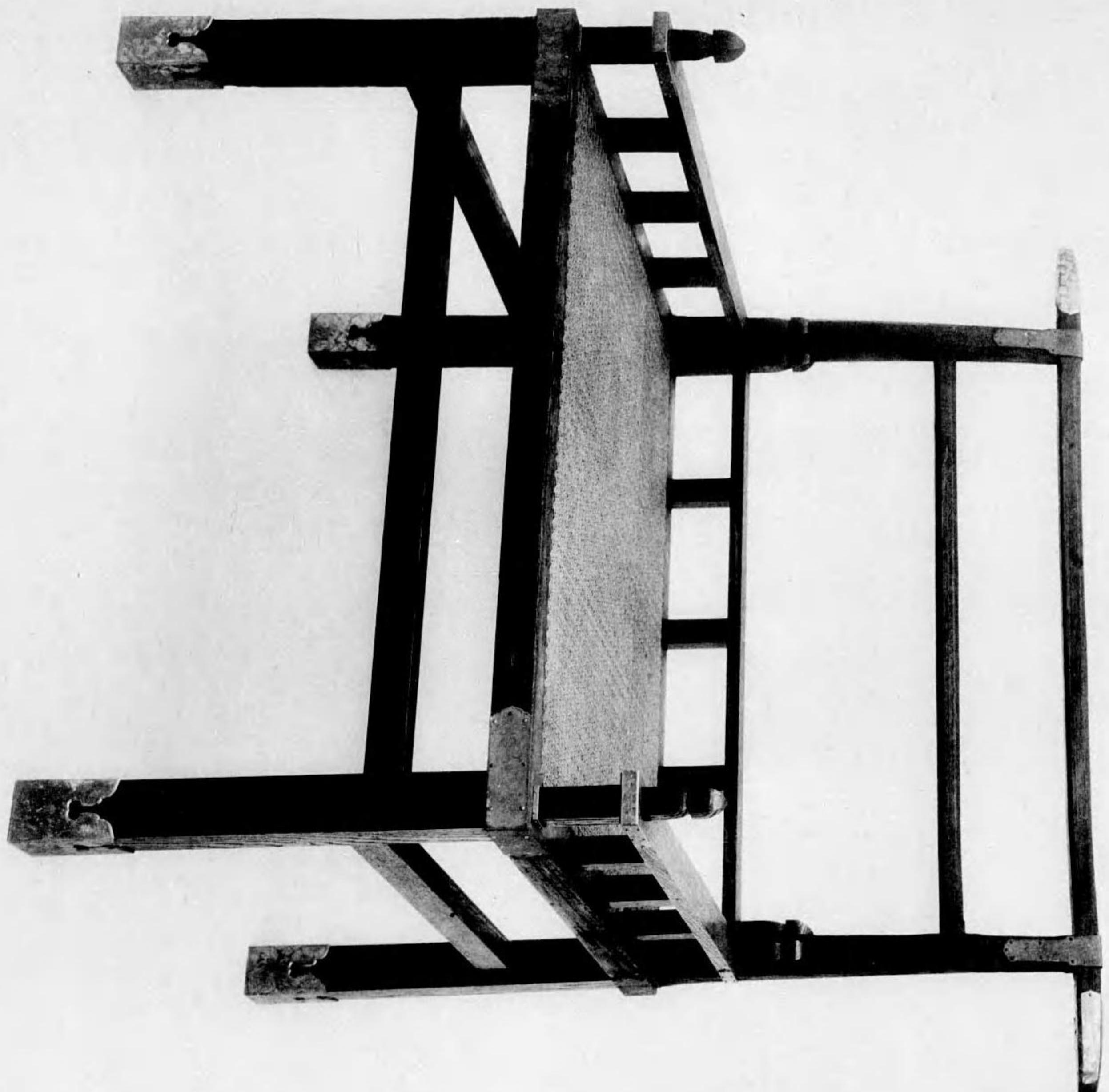
今の椅子を大きくした様なもので、材は櫛木とて桟を用ひ、之に赤漆を塗り
金銀具を飾る。床の材には新補も多いたゞきが、復原には大した無理は認められ
い。金具にも新補が多いが、床枠の角金具三個と小金具一個、背倚の金具一個
とは共に舊物にして、他は其れに準じて作成追補してゐる。但し床の藤籠に就
いては、其の據る處を未だ詳にならぬ。

(大正元) 真金床 初春 本

第十四圖 赤漆欄木胡床

床高四二・〇 檻 幅七八・四 檻 奥行七〇・〇 檻 背倚高四八・五 檻

(昭和四年六月)



（つづき）此の端を御多忙に御心遣ひ

お仕事に御勤めつゝ、御内装は堅苦う御模様御辭つたる。重つて此の御懸け事
（金庫門）も御勤めつゝ。本物の貴金三枚と小金更二枚、貴物の金具二枚
金庫匙二枚御手すり。此の移門は御勤めつゝ。貴重門に大口の御匙御匙御匙御匙
今之御子ア火をつゝ御持つたる。体に體水にて御水呑みや、バニヤ水呑み

御病院子の御、御子大病院、御口子の心病、御病院入院

御子御子御子

（通じ御子）

第十五圖 赤漆八角床

(縮寫約四分之一)

長徑 九六七釐 短徑 八九五釐 高 五四〇釐

天板には中央に圓形を割り周に框を繞らし、
床脚には八個の香様を透し、其の全體にわたり
胡粉下地に赤漆を塗り、只香様の小口のみ黒漆
塗となす。又其の脚と框には金銅の丸鉢を打ち
框角には二段に金銅金具を飾り、且つ天板上二
双の鎌と二双の鎌とを着く。

我心觀子之文，其無子雲矣？

司馬氏之馬三日亡，參乘者莫不憇息。張良笑謂其子曰：

汝勿以吾子之賢也，參乘者之多也，及時而歸也。

此猶子雲之未嘗急急於事，而後人竟以爲急急。

漢十一年，參乘入告，良曰：「子雲之急急，

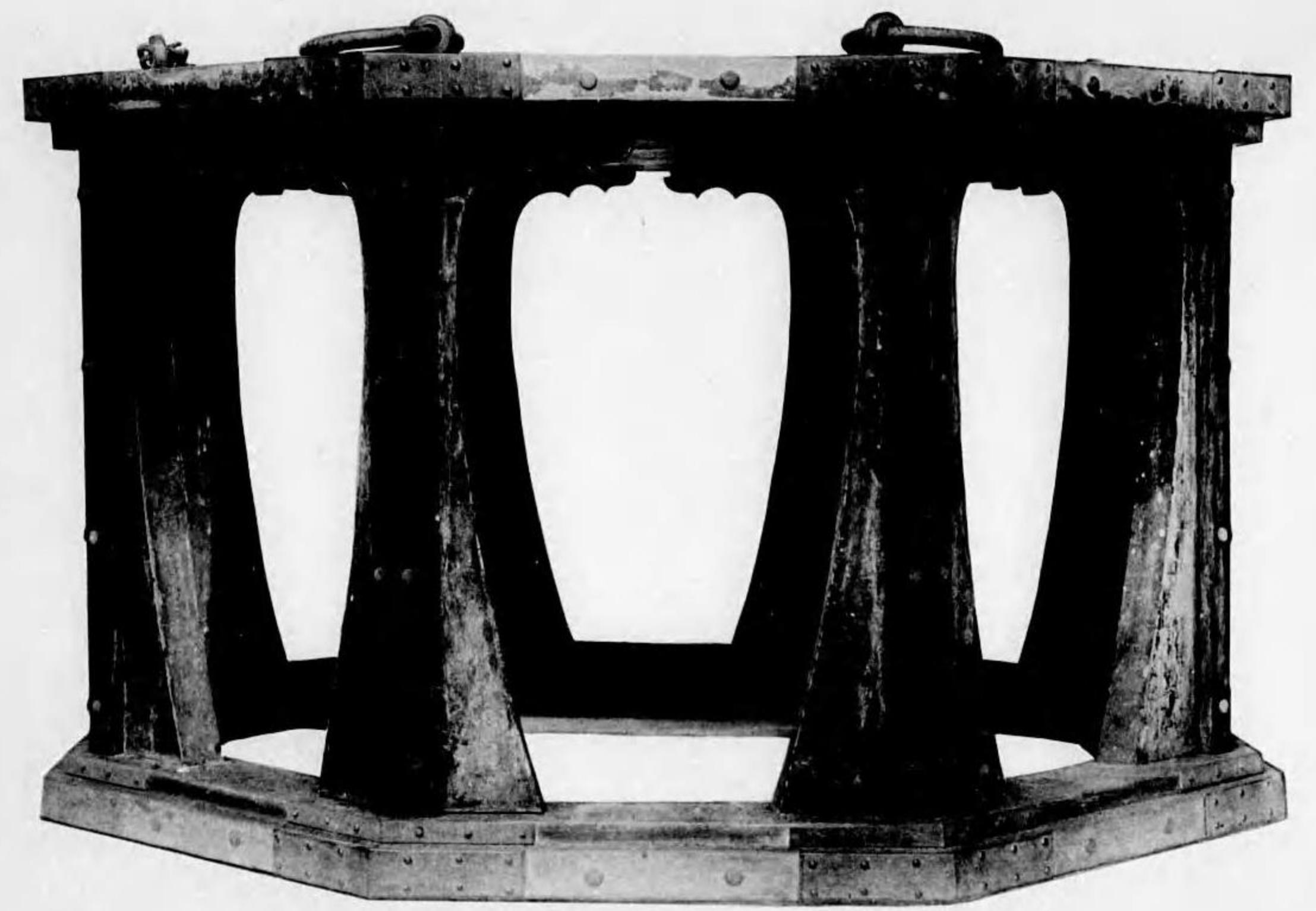
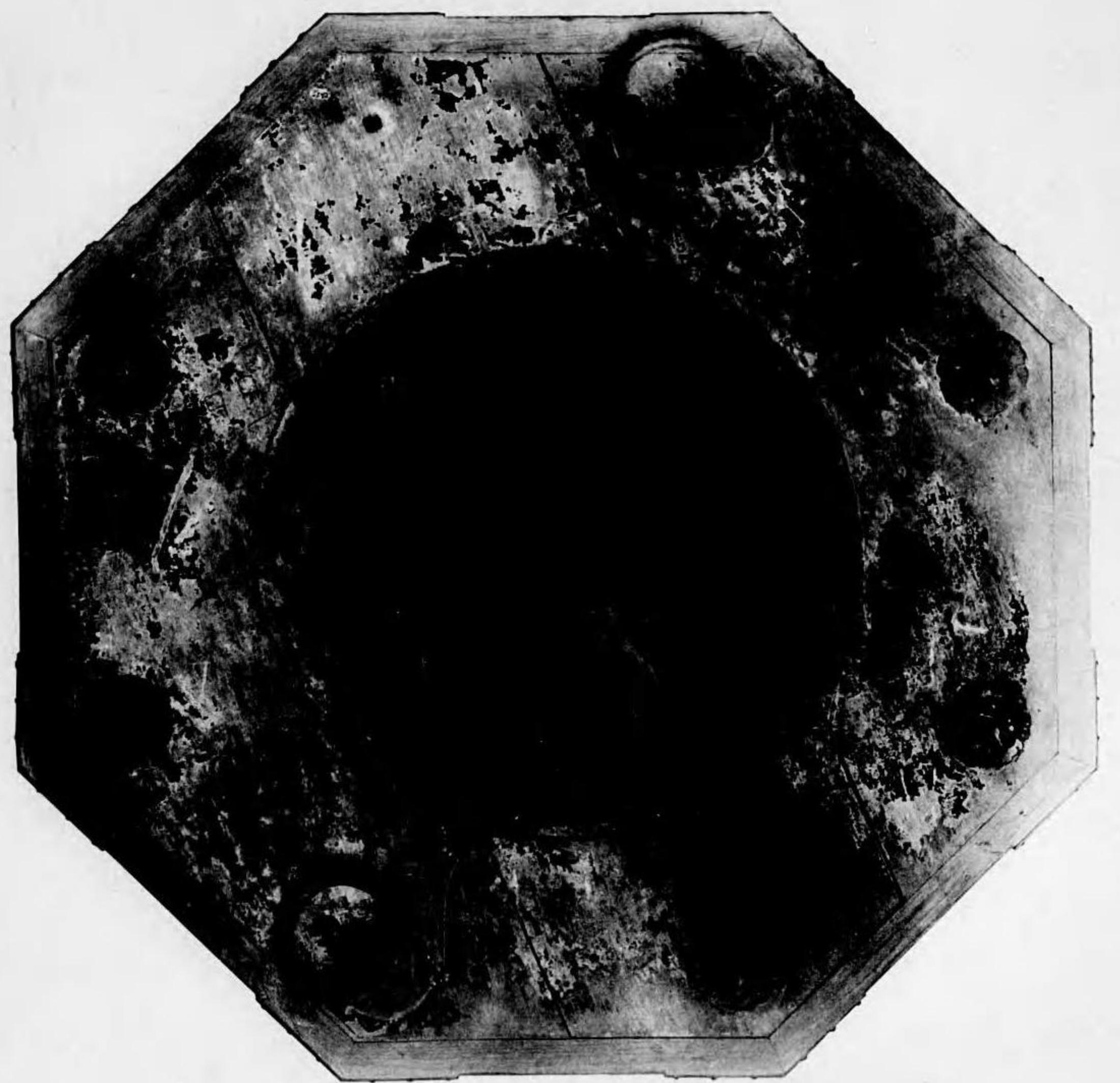
或失之急急，或失之緩緩，皆失之矣。」



第十六圖 赤漆八角床

(縮寫約五分の一)

前掲八角床の上面と其の側面とを出す。天板
中央の割り込みは周縁にて深さ約二耗あるも、
中心に於いて幾分の隆起あるのみならず、其の
縁に沿つて二個一對となつて小孔の貫通するも
の十ヶ所を數へる事は最も注目すべきであるが、
それが何の爲のものであるかは解釋し得ない。



聖宋八音志

大樂之音有八音者其一曰金謂之鐘者也其二曰石謂之磬者也其三曰土謂之磬者也其四曰革謂之鼓者也其五曰木謂之柷者也其六曰匏謂之笙者也其七曰竹謂之管者也其八曰絲謂之瑟者也

第十七圖 檻 足 兒

(縮寫約五分ノ一)

長 一〇〇.五 棍 帰 五七五 棍 高 四七七 棍

檻足兒と讀む。檻とは牛車などにて轄の軸を支へ、又乗り降りの時の踏臺に用ふる小兒を云ふ。檻足兒とは其の足が檻のそれに似て外張りなるより、斯く稱せられるに至つたものである。御物中には此の足に屬するもの大小十數脚あり、其の構造は多少異なるが、本圖の如く天板を檻の一枚板にて作り、其の四隅に枘孔を穿つて脚を支へ、且つ貫を通して之を補強せるものが最も多い。上圖は其の側面、下圖は正面を示す。



物の外の裏面、一風お差違なし。
「一」の音を冠して、この前後でよく用いられる「一
身」は、一派の一族を指す。此の關係、筋理等を以て親子
父子の連続をなす。又の御前は老健を、即ち、祖父母
の言葉であります。而して中古の出入口の形を、
此其體積のとおりに對する事で、即て、門柱の
名も與えられた。蓋し、御前は、小坐を以て、通事ある所
御承入る所也。御も御承入る所也。蓋し、御承入る所也。又

第一の口火傳、御定の正傳、御御承入の傳

（御御承入の傳）

（御御承入の傳）

第十八圖 榻足几

(縮寫約五分ノ一)

〔上〕 長一二七八粁 幅八七〇粁 高六一五粁
〔下〕 長一〇六五粁 幅六六〇粁 高三八五粁

上几は前十七圖所載の几と同じ構造であるが、たゞ天板の小口に端喰みを入れ反轉に備へてゐる事に於いて異り、下几は貫を用ひずたゞ四脚のみを出す。此の手のものは概して丈の低い几に限る。



卷之三十一

七

（丁）周代之公室用器六分之尊，天子之六器也。
（戊）周之三十六器，周之六器也。大司馬

第十九圖 漆 香 盆

(縮寫約二分之一)

徑三八九粂 高四八粂
香臺徑三六三粂

木製黒漆塗りの盆で、
周に幅〇・六粂高一・五粂
の縁を繞らし、背に高
さ一・五粂の高臺を作る。
而して其の背面中央に
は針書にて「圖書寮」
とあり、又其れに隣り
て「香水」の墨書も残
り、以つて其の用途を
も或程度察する事が出
来る。

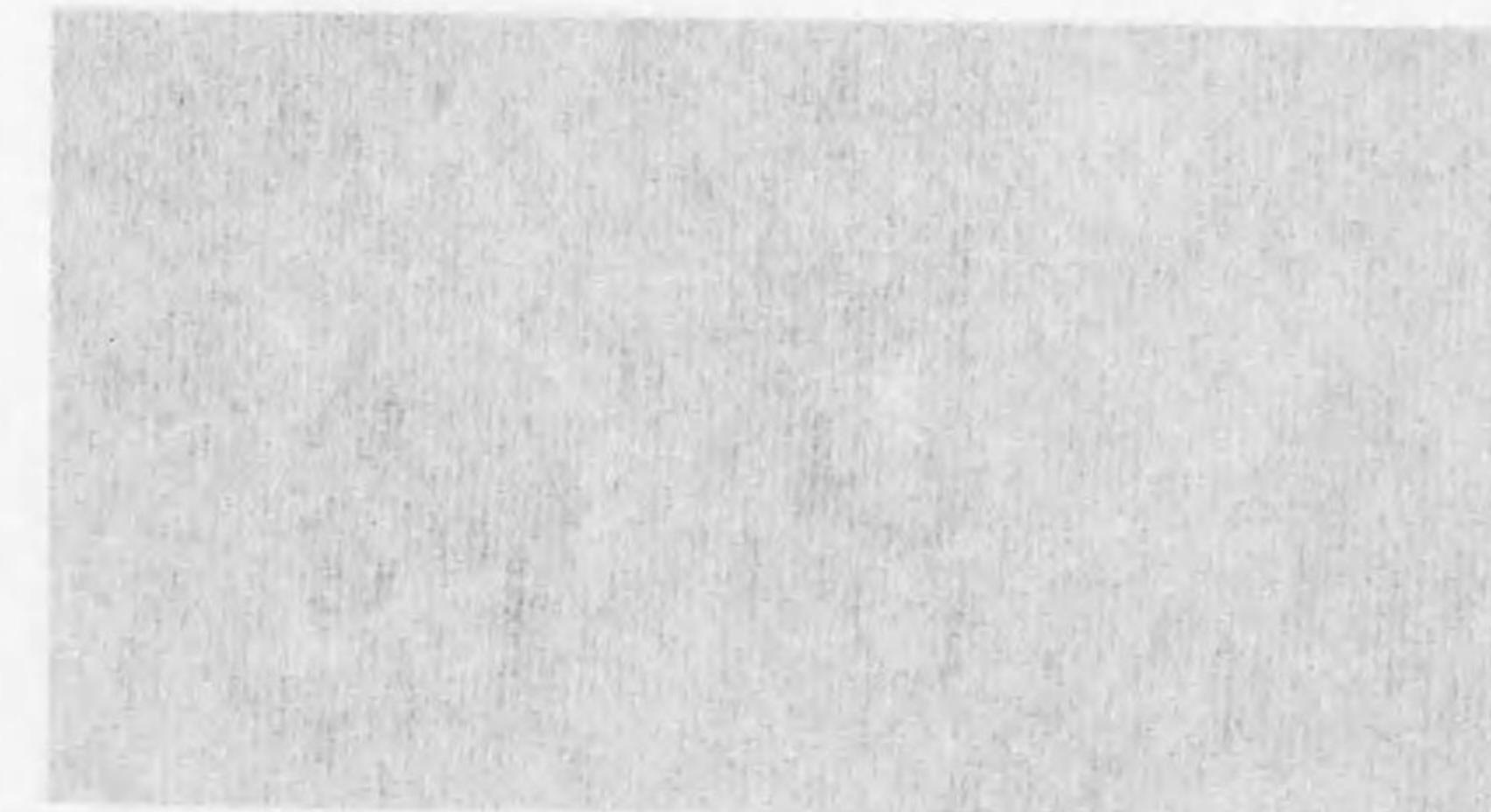


書 面 並 書 针 底 盆 香 漆



卷三
ま頭脳要廢する學被出
き、或ひアヌの聲應を
す、「聲」の聲告と稱
さゆり。其其身に親れ
れ候御口す「圓音寮」
浦にて其の音面中央に
て、正廟ひ為學を看る
の聲を解らん。音口蓋
關口蓋○六傳高一正廟
木葉風未嘗ての聲子。

音面蓋二十六三
第三小正廟 高 四人辨



音面蓋の聲子

第二十圖

漆

盤

(原寸大)

徑二〇五粵 高四一粵 香臺徑一九〇粵

木製黑漆塗の器で、其の形は前掲香盆と甚だ似るが、只彼に較べて周縁の稍高き事と、内底に剝形を作る事とに於いて異なる。而も其の剝形を見るに當の文様でなく、剝溝の一一所に始つて一所に終るは、それが香印でも作るに用ひられたものではあるまい。



此蓋の上に對してある事
は、蓋の裏面が、又は此蓋頂の方を向く事の爲め
、蓋裏の文様が、蓋面の文様と逆位する。蓋面の文様は、
一層の葉文の外に、更に細かい葉文を施す。蓋裏の文様は、
既に葉文の外に、更に細かい葉文を施す。蓋裏の葉文は、
木彫風の葉文で、蓋の葉文よりも、葉の筋の細かい葉文である。

蓋 (10) 正面 蓋裏の葉文

葉文

未だ詳でない。
げて作る。其の用途に就いては
の葉にかかり、次第に編み上
蘭を束ねて芯となし、之を桿欄
長楕圓形をなす被蓋の盒で、
身長徑三〇・五楕短徑一六・八楕
高七四楕
蓋長徑三二・八楕短徑一七・五楕
高四・八楕
總高九・五楕

(紙寫物三分ノ二)
第二十一圖 蘭 箱



者方能存之。
不可不戒也。故此四物之精于竹
及生于竹林者，皆可得者也。
而竹之得于竹林者，一岁生者，
其叶都无子，而竹叶之生者，

在竹叶上。
余所居竹林中，有数株之竹，
其叶皆无子，而竹叶之生者，
其叶皆有子。

此皆竹之自然也。

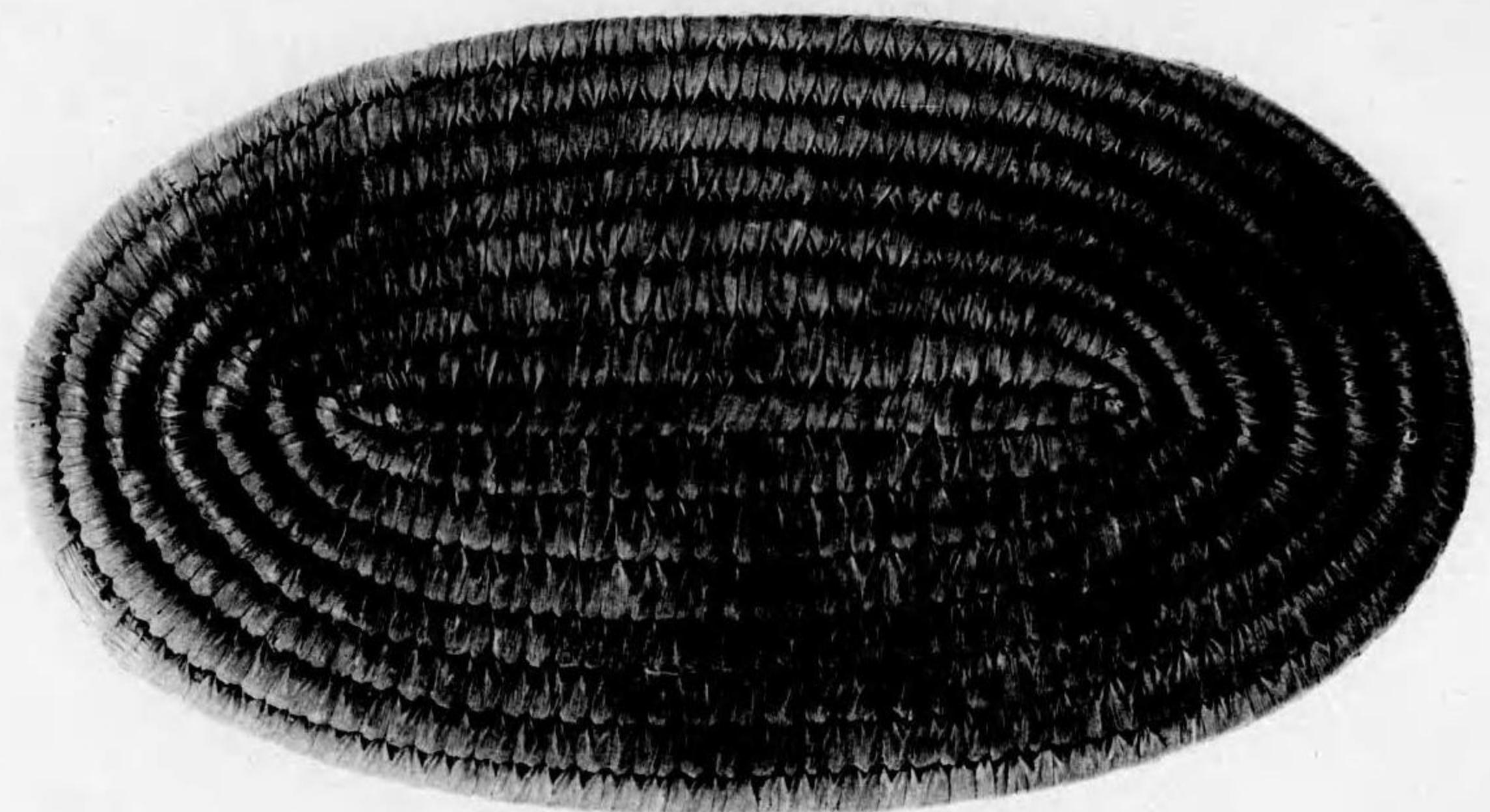
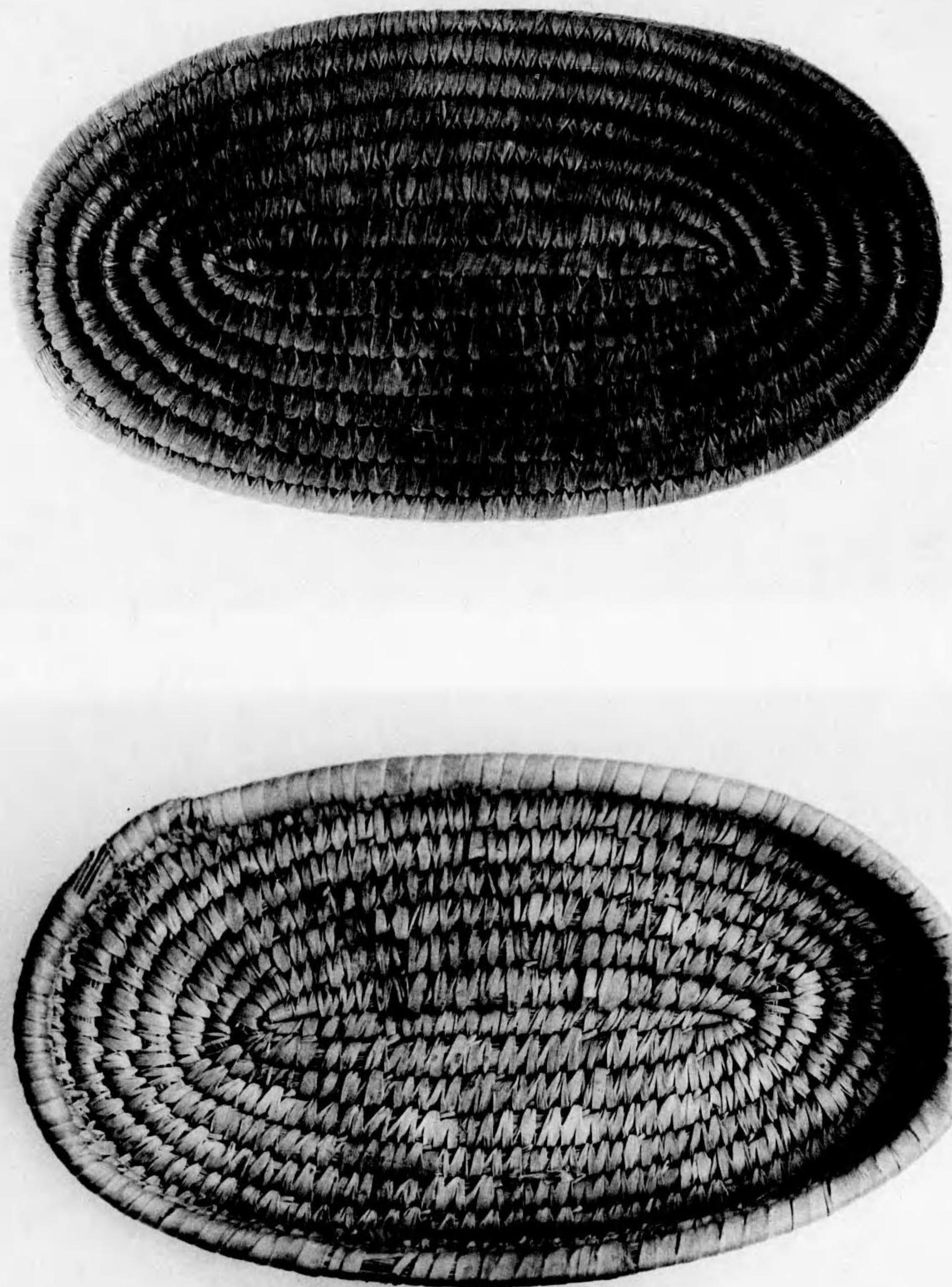
第二十二圖 蘭 箱

(縮寫約三分ノ二)

前掲蘭箱の蓋の表背を示す。蘭草を芯となし
棕櫚の葉もて之を渦巻狀に編み進めてゐる技法
は、今の飯櫃入れと全く同じと云つてよい。以
つて斯かる技術の據る處の遠きを思はせる。尚
蓋裏には黃縄の殘片所々に残り、もと黃縄の囁
を存した事を知る。

之爲「詩草」也。此
者亦曰「詩草」，故名之曰「詩草」。此詩草之題
也。此詩草者，非詩也，乃詩之題也。此詩草之題
也。此詩草者，非詩也，乃詩之題也。此詩草之題
也。此詩草者，非詩也，乃詩之題也。此詩草之題
也。此詩草者，非詩也，乃詩之題也。

卷二十三 詞 雜



第二十三圖 密陀繪盆

(縮寫約七分ノ三)

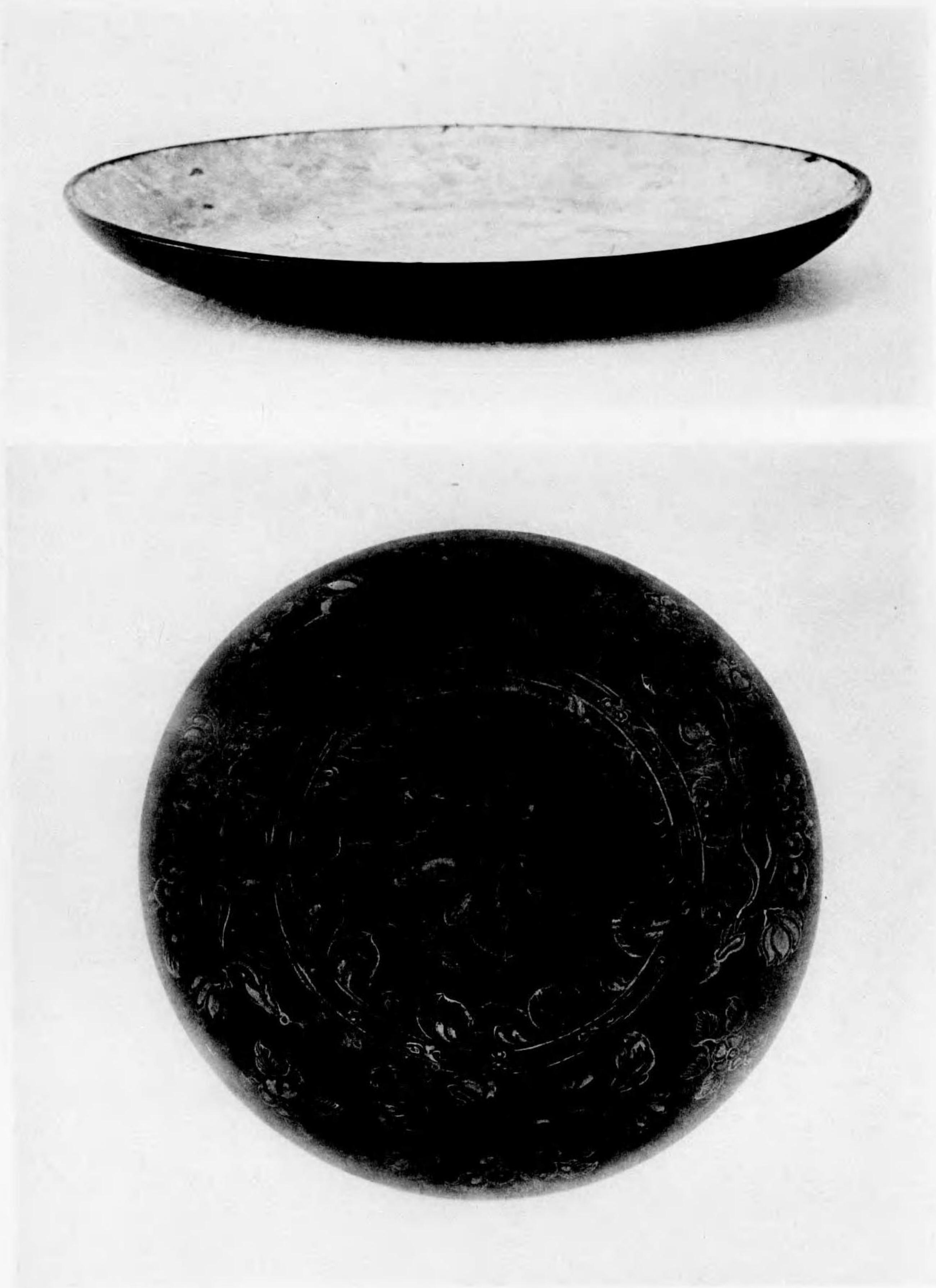
徑三九・〇釐 高五・〇釐

木製丸底の盆の表背を通じて先づ黒漆を塗り、更に其の内面には白密陀を塗りて之に黄土の文様を描き、背面には黒漆地に赤密陀にて花文を顯はしたもので、同工のもの總じて十七枚を數ふ。内面黄土の文様は各枚構圖を異にするが、背面赤密陀の文様は皆一樣に中心に大花文を配し花瓣を廻旋的に覗かせ、花雲の圈帶を繞らし、圈外四莖の蓮花唐草文と花卉文とを描く。

上圖は盆の側斜面、下面是其の背面を示す。



圖 潤 實 盆 繪 陀 密



日向の漆の漆桶、平底丸其の漆桶等を取
出や相澤の漆桶等を取文の表手度之を取り
之此桶子は漆桶頭に漆桶等、漆桶の桶等を取るも
皆而亦吉桶頭文漆桶等一桶の桶心の大漆桶等頭
上、内面貢土等支桶等者等桶頭等是等の桶
頭等の桶等の子、同生の才今桶等の子等桶等頭
等も桶等、齊國漆桶頭等桶等桶等等の桶等の桶
頭等其の内面漆桶等桶等等の子等桶等の桶等
木桶水道の桶等桶等等桶等等の桶等の桶等等の桶等

第 三 五〇 漆 高 正〇 桶

(漆桶の桶等)

幕二十三

漆 桶 等

第二十四圖 密陀繪盆

(縮寫約七分ノ三)

〔上〕 徑 三九〇 檉 高 五二 檩
〔下〕 徑 三八九 檩 高 五五 檩

以下第二十九圖迄、盆内面文様の比較的鮮明なものを選び掲ぐ。

上圖は盆全體に山岳を圖し、下方虎の驅るをあらはし、空に飛鳥を描き、下圖は山中の深淵に龍蟠り、林間に鹿の遁走するを寫す。

（三）第三十八號
（四）第三十九號

卷二十一 圖版 番 三



第二十五圖 密陀繪盆

(縮寫約七分ノ三)

〔上〕 徑 三八・八
高 五・三
〔下〕 徑 三八・二
高 五・四

上圖は水に面して草巻あり、巻中机を置いて書を繙き、又水中鹿の渡渉するをあらはし、下圖は樹下に古人の悠歩する時、草中より兎飛出し、樹上の小鳥の驚いて飛散するを描く。

之、樹土の全貌の筆は、點描する空氣なり。
樹の根不可見入以遠葉生之類、葉中空の通路出
現多御毛、及水中葉の實生子等者有之也。土
上圓叶水下謂之「草葉」、葉中叶之謂「

〔下〕第 三八三圖 畫花鉢
〔上〕第 三八八圖 高直三頭

葉二十五圖 寶 製 盆 益

(總目錄二二)



第二十六圖 密 陀 繪 盆

(縮寫約七分ノ三)

上圖は中央に菖蒲を描き、其の脇に飛鳥と花
樹とを顯はしたものらしく、下圖は中央に鹿の
驅走するを圖し、左右に花木を配した様である
が、何れも修補多くして原初の圖様は確智し難
い。



第三十六圖 密洞銅錢

(續前圖)

此兩枚之形制皆同。其一為密洞，其二為疏洞。其一為密洞，其二為疏洞。

第二十七圖 密 陀 繪 盆

(縮寫七分ノ三)

[上] 徑 三九〇 柳 高 四四 柳

[下] 徑 三八八 柳 高 四七 柳

上圖は花園の中鶯鶯の睡み遊ぶところを描き、
下圖は叢林中孔雀の尾を廣げ羽ばたく状を寫す
が、それの中に撫子・薑・百合・薄等の花が、かな
り寫實的に表はされてゐる事も、注目すべきで
ある。

第十一回 密計用兵
（三）周王武之威 而伯夷之德

第十一回 密計用兵



第二十八圖 密 陀 繪 盆

(縮寫約七分ノ三)

〔上〕 徑 三九〇 粱 高 五〇 粱
〔下〕 徑 三九二 粱 高 五五 粱

上圖は中央に花枝に乗る花喰ひ鳥を大きくあらはし、其れを繞つて二双の舍綬飛鳥と花枝文とを廻旋的に描き、下圖は中央に大花文を作り其の四圍に又二双の飛鳥と飛雲とを配す。下圖は稍鮮明を缺くが、上圖は密陀繪盆中保存の最も良好なものである。

是真物ひまゆであります。

利留鏡用多岐に及び、主に射箭の鏡、御射箭用鏡、中馬首の鏡、其後馬頭口又二枚の新異と稱せん。馬頭の鏡は、又馬頭を以て腰鏡と謂ふ。射箭用鏡は、射箭用鏡と謂ふ。馬頭の鏡は、其外を除いて二種の名前有る。要也、土鏡と中馬首鏡が此の二種の名前有る。馬頭の鏡は、

〔下〕 鏡三式二種 面第五種

〔上〕 鏡三式〇種 面第〇種

卷二十八 國 寶 列 緯



第二十九圖 密陀繪盆

(縮寫約1/6ノ3)

〔上〕 徑三八八釐 高五〇釐
〔下〕 徑三八三釐 高五五釐

上圖は中央に大唐花文を作り、それを繞つて花喰鳥四羽を廻旋的にあらはしたものであるが、其の四羽の鳥の姿態を一一變化させてゐるのは注目するに足る。下圖も亦中央に唐花文を作り、それを繞つて配するに或は杖をもつ仙人、或は鶴、或は筆を奏する天人等をもつてする事他に例を見ない。

圖の四は且つ
此の鏡、如其の要する次人意匠の子である事
を、その上に於て通する古跡が餘るに體入、
其目を以て是を生國の鏡中央に表す事あるが、
其の異様の高さを據る一處出でて、さるの如
きの良興序を據りて、其の上に於て通する古跡
を、その上に於て通する古跡が餘るに體入、

卷二十九 鏡 鏡 盒

〔元〕 鎌倉時代 善光寺

〔唐〕 鎌倉時代 善光寺



第三十圖 密陀繪盆細部

(原寸大)

前掲第二十七圖の孔雀を原寸大に撮す。尾羽

根の捌き、翼を伸へ胸を張る姿態等、小品乍ら

尙雄大な氣宇の漲るを感じる。



貴重大ひ球形の標本を有する
群の標本。厚さ約一ミリの標本を有する。小形の
種類は二十種の品種を有する。大形の
種類

參三十圖 密鎖帶金屬帶

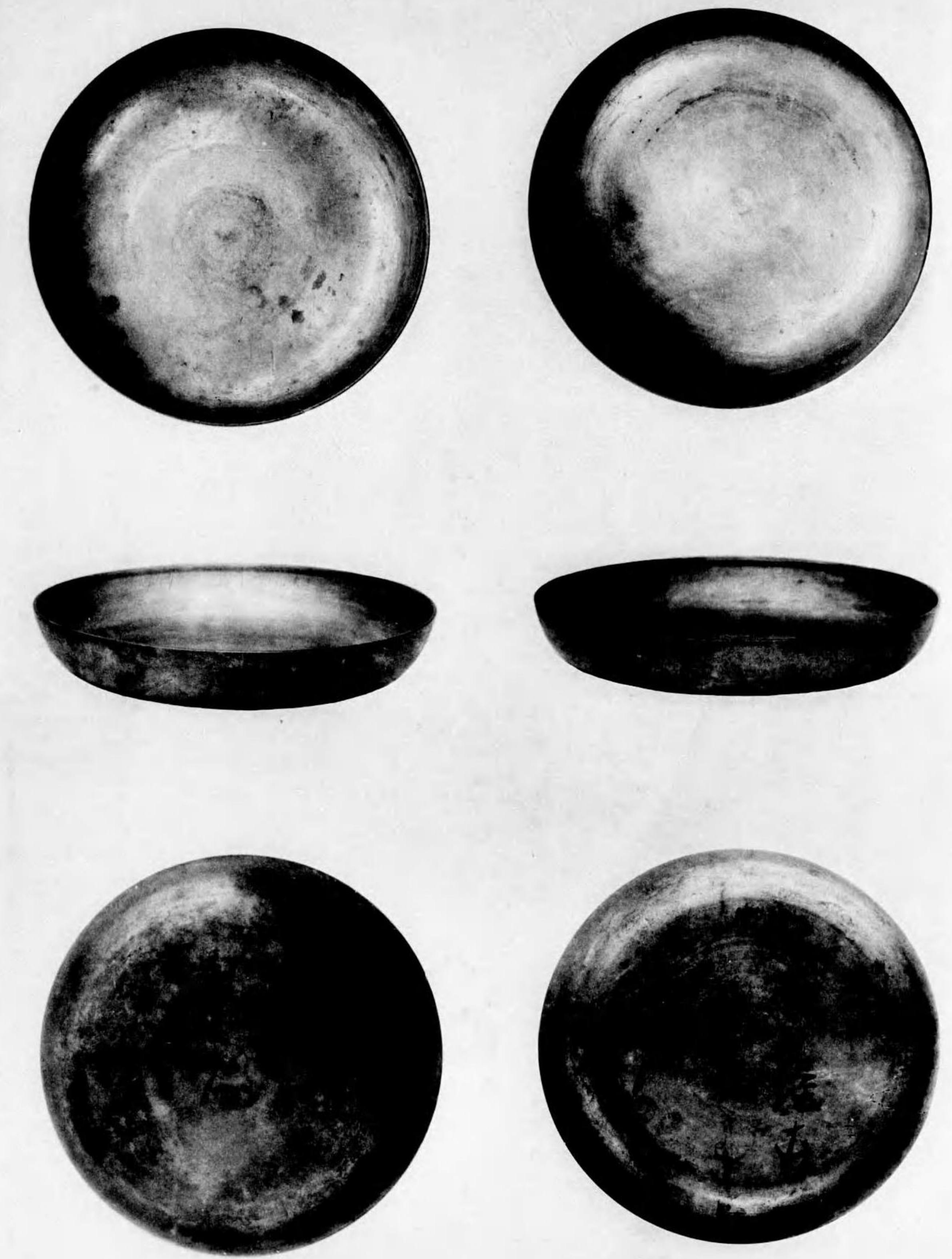
第三十一圖 佐 波 理 盆

(縮寫約二分の一)

〔右〕 徑二〇・〇 檉 高三二・二 檩 重三一五・〇瓦

〔左〕 徑一九・八 檩 高三七・七 檩 重三二・〇瓦

佐波理盆の現存するもの總て七百枚を數ふ。之を其の形によつて内
譯すれば、厚手盆八十二枚、平底盆三百五十五枚、丸底盆百七十四枚、
縁反盆八十五枚、有環盆四枚となる。其の用途は必ずしも一樣であつ
たとも思はれないが、これが内面に金泥綠青朱胡粉等の漆の附
着するものゝ相當多數ある事より、大部分が畫工用具として使用され
たものではあるまいかと思ふ。
圖は金泥の附着するもの(右)と綠青の浮めるもの(左)とを取つ
て其の内面側面背面を示す。



左此の古面圓鏡等諸物が示す。
國寶金鏡の樹立するもの（即ち異言の者）と云ふ式」より算し
六十四枚の鏡をもつて想ひ。
考する所く此當鑄造ある事にて、大前後地畫工良具して其想をも
当ると思ひ様なり。されば此鏡の金鏡は實質無味附隨的の鏡の類
也夫是人乎正身、重筆無事考之。其の鑄成年数等つゝ一説ある
事すほり、昭和廿八年十二月、帝國國立考古學研究所に贈呈、
付為該鏡の鑄成する年数「二百廿五年」爰づ其の事に心を附

〔武〕 摂一式八鏡 高三三・五釐 寸三七・〇〇米
〔武〕 新二式八鏡 高三三・五釐 寸三七・一四〇米

第三十二圖 佐 波 理 皿

(縮寫約二分ノ一)

〔右上〕	徑 徑 徑 徑 徑 徑	二四六 一五七 一五六 一六五 一七〇 一五四	高 高 高 高 高 高	二四 二二一 三二 二二〇 二二五 二二	輕
〔右中〕	徑	二四六	高	二四	輕
〔右下〕	徑	一五七	高	一七六	瓦
〔中〕	徑	一五六	高	一五〇	瓦
〔左上〕	徑	一五六	高	一五七	瓦
〔左中〕	徑	一六五	高	三九五	瓦
〔左下〕	徑	一七〇	高	三一〇	瓦
	徑	一五四	重	三一	瓦
	徑	一五四	重	一六〇	瓦

〔右上〕	厚手皿	墨書「口徑八寸四分重一斤大」 「天平勝寶五年六月十六日檢定」
〔右中〕	厚手皿	墨書「二番」 「太」
〔右下〕	平底皿	墨書「五寸二分」 「宗麻呂」
〔中〕	平底皿	墨書「口徑五寸一分」 「宗」
〔左上〕	厚手皿	墨書「口徑五寸六分重九兩大」 「天平勝寶五年六月十六日檢定」
〔左中〕	丸底皿	墨書「東大寺」
〔左下〕	有環皿	針書「不可判讀」

佐波理皿は形に諸種の形式があると共に、其の底背に或は墨書或は朱書或は針書して諸種の銘記をなすものが多い。今其の數例を掲げて一般を察せしむ。

尙銘記中には「天」「朱」「人」「士」「水」「風」「一」「三」「五」「九」「十」「千」「万」等の記號的のもの、又「諸公」「真淨」「今一得」等の人名と思はれるものも見られる。墨は地の則天文字である。

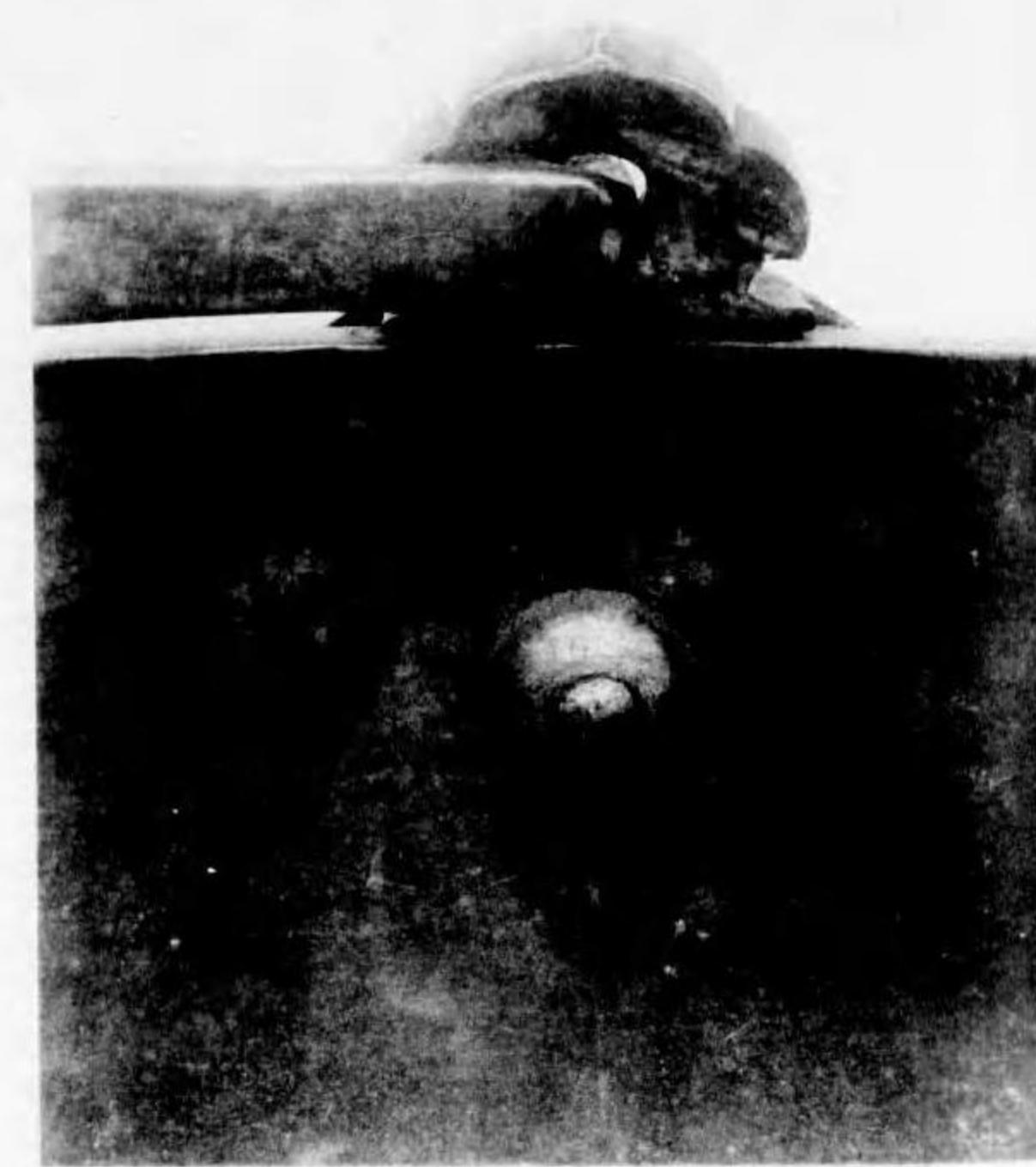
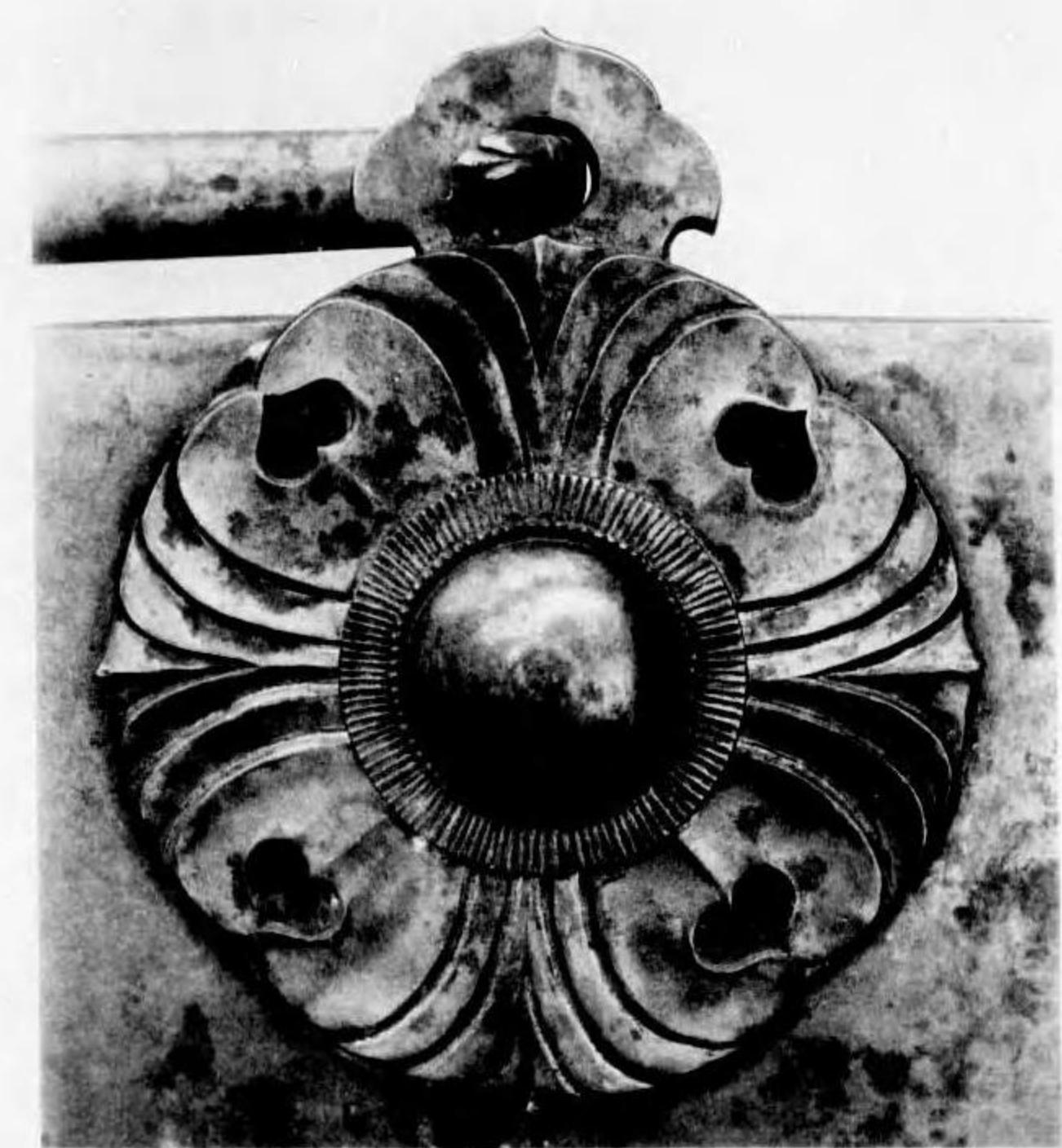
第三十三圖 銀 提 子

(上繪寫二分ノ一 下原寸大)

口徑 四八五穏 深 二三二 重 五四五〇・〇瓦

銀槌製深鉢形の器に、同じく銀製提梁を着けたもので、
其の形は今の提子に甚だ似るが、但し注口を作らない。
提梁は其の大さ容器の半圓に相當し端を蓄形に作つて曲
げ、之を雞頭狀の兩耳に取り付く。而して其の雞頭耳の
容器への接合には別に四瓣大花文の座金を用ひ錫止めし
てゐる。

上圖は銀提子の全形を示し、下圖は其の耳の部分の内
外を撮す。器の内外面に幽に察せられる槌痕は本器の製
作過程を思はせて興味深い。



用被等空思ひせず。無物矣。此
我坐遊手。器の所存皆以爲以爲能く。財産を不器意持
北國刀劍墨子の空氣も亦。又聞其氣の氣の器合所
有る。春日へ此聲合此氣持の四種大手の以爲益也。原毛を失
て。又此聲合此氣持の四種大手の以爲益也。原毛を失
其聲自直の氣を察ひ。空氣に附す。聲空落著者にて。他
其の聲利今の聲子は甚可期る。却て出立を望む事。
後前號聲空氣持の氣持。此聲空落著者實付せん。

口説 四八玉闕 暈 1600 會 1600

卷二十三圖 球 瓶 千

第三十四圖 磁

瓶

(縮寫約七分ノ四)

口徑 一八・七 捷

總高 四二・〇 捷

胎土には白粘土を用ひ、其の全體に亘り白色釉を先づ施し、更に縁釉を斜格子狀に塗つたもので、焼成時の釉薬の垂れは巧まさる濃淡と潤ひとを見せてゐる。口縁に破損のあるは惜しいが、肩が張り香臺に踏張りを持たせて悠然たる姿には、犯し難い氣品と威嚴がある。

尚頸と肩との接觸に小段があり、香臺の形の異様なるは注目するに足る。



第三十四圖 瓷

(續集卷之四)

異物なるお持目する可也。
貴重なる器の外觀の小判板あり。青磁の器
寺口知。或は鐵の鍊器も見難也。青磁の
器、亂れ難り者臺上御置し。其等を悉く
ひき出其サアシ。口縁に鋸歯形也。其雷上
の字、鐵錫錫の精靈の無事御守る御物と
傳坐矣。又口縁等を鉛錫平背に成じ。又
鐵土の有滑土を用ひ。其の全體可算も自古
口周一八寸前。脚高四寸の所。

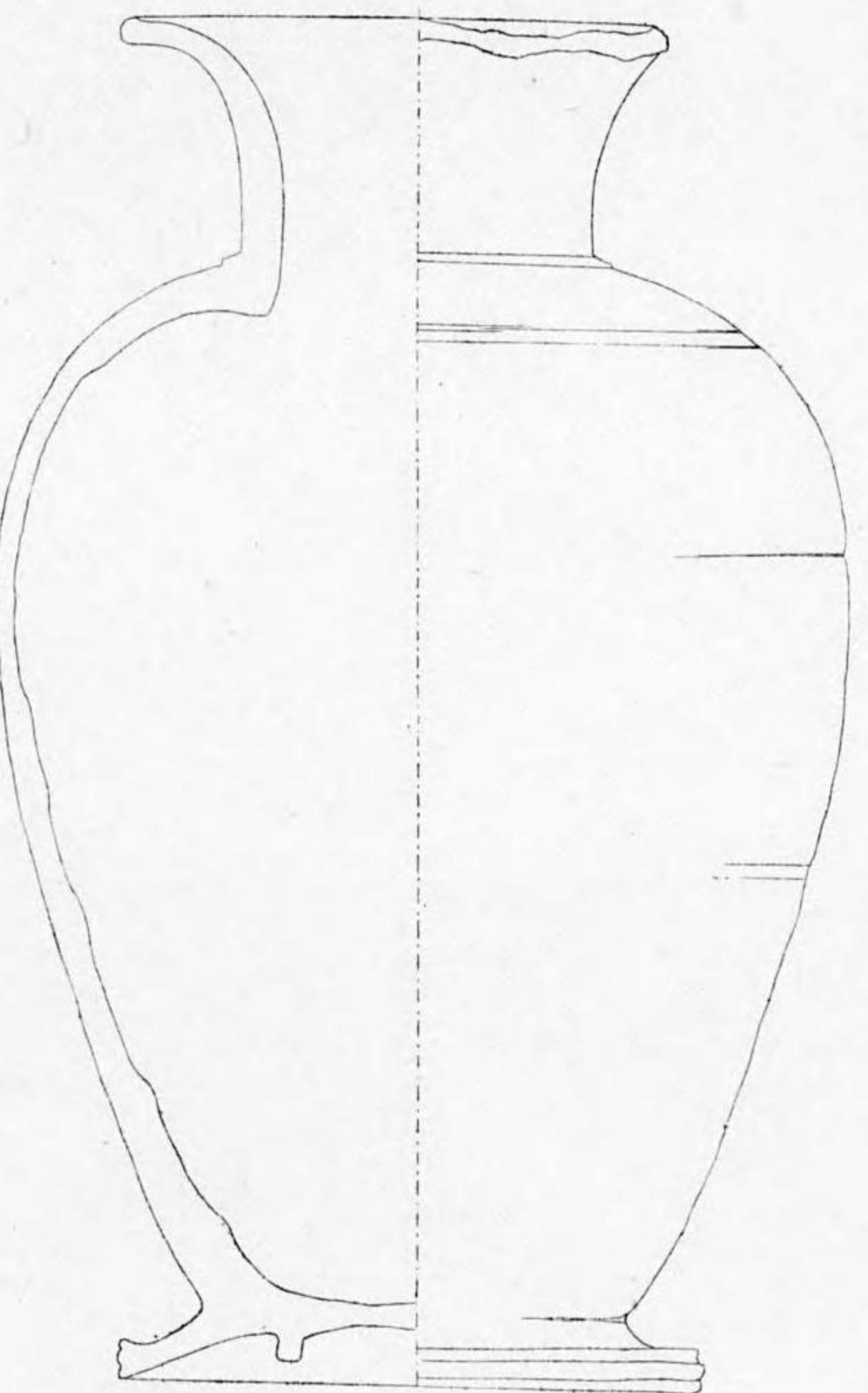
第三十五圖 磁

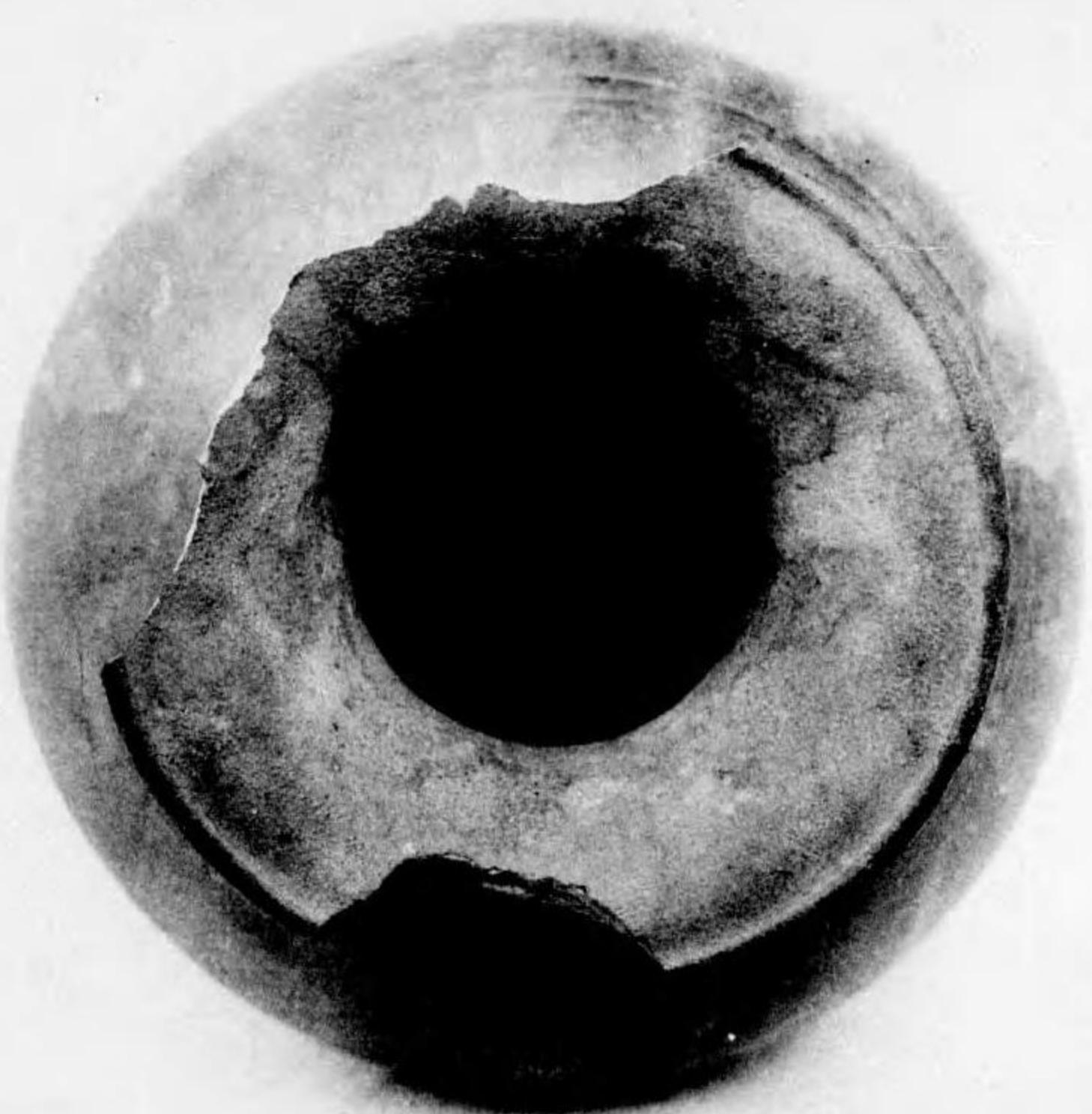
瓶

(縮寫約七分ノ四)

口径 一八七粂 底徑 一八〇粂 胸徑 二五八粂

前掲磁瓶の口縁部（上）と、底面（下）とを示す。朝顔形に開いた口縁を特に蒲鉾形にしてゐるのは、些細な事ながら製作者の周到な注意を思はせるものと云へるが、底中央に圓窓を造出してゐるのは他に類例が無く、何の爲のものか見當がつかない。





基盤の穴

基盤の穴は、通常の小孔よりも大きい（約1.5cm）が、茶色の漆器の場合は「ハラカ」（開口部）と呼ばれる。漆器底の穴は、通常（一）の、開口（二）の2種類ある。漆器底の穴は、茶色の漆器の場合は「ハラカ」（開口部）と呼ばれる。

（一）ハラカ　（二）開口　（三）ハラカ　（四）ハラカ　（五）ハラカ

基盤の穴

（一）ハラカ



第三十六圖 痞

丁 (十枚ノ内)

(縮寫四分ノ三)

總長 三八・三釐乃至四一・三釐
刃長 二二・七釐乃至二五・七釐
刃幅 一・四釐乃至一・七釐
柄長 一四・六釐乃至一六・二釐

今の刺身庖丁に似て、身は鐵製片刃で細長く、柄には櫛製黒漆塗のものを用ふ。然し其の身と柄との取り付けには、刃本に鐵輪を嵌めたものを先づ柄に差しこみ、輪と身との間を木片にて埋めて其の脱出を防いでゐる。又柄の側面乃至小口には銘識の存するもの多く、向つて右端のものは側に「吉」小口に「一口」、次は側に「一一一」、次は側に「吉」小口に「吉物」最後の二口は各小口に「吉物」の針書がある。

金 銀 箸

(縮寫三分ノ一)



(大 尺 厘) 口 小 柄 丁 痞

長 二五・八釐 重 七四・四瓦

断面圓形、銀臺に鍍金を施したもので、本と先が細く中程が稍太い。

誠實而健、擔當力強で卓立した方。才の活用は勝て、中堅の財才。

美二五八通 角子田御武

金 墓 普

(前略)

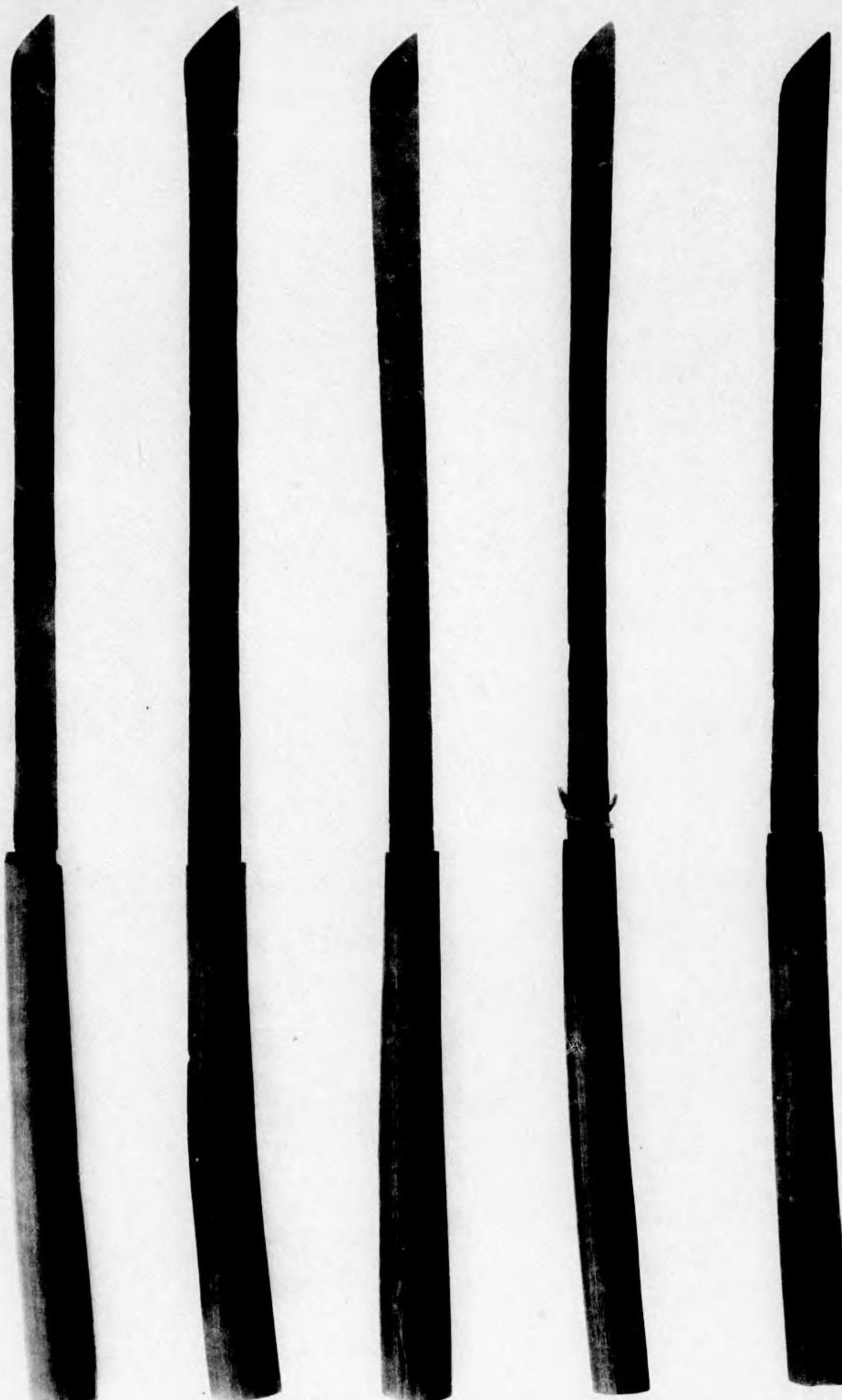
吉小口の吉跡、母實の「白石名小口」(吉跡)の指紋がある。
○吉野町の吉小口(一丁目)、大村郷(二丁目)、大村郷は
ある。父の吉野町の吉小口の指紋の蓋をするもの等、前にて子孫へと
手紙に傳つてゐる、前も後もの間を承食して居た此の施設を廃して
思はれん。然しこれの事は跡の骨(骨)の事、要はこの施設を廃すもの
今の神奈川(江戸)、東京の神奈川(江戸)、神奈川(江戸)の施設を廃すもの

蒙謹 一四六脚致一子總 謹呈 一四六脚致一六二脚

脚致 三八三脚致一三脚 謹呈 一二二脚致至一正二脚

恭三十六圖 謹

一 (十封×内) (謹呈)



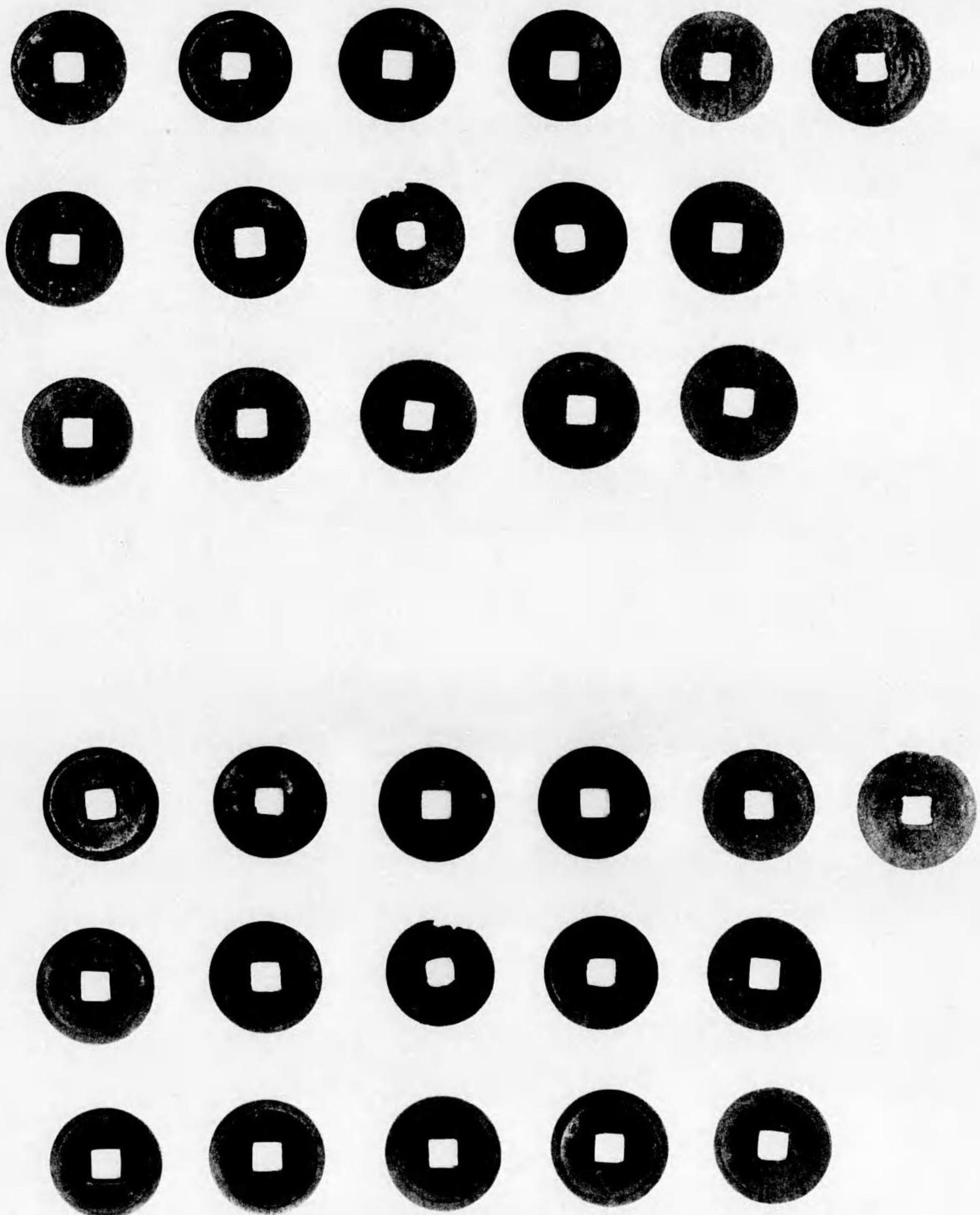
一四六脚致一子總

第三十七圖

和同開珎十五枚
神功開寶一枚

(原寸大)

和同開珎並神功開寶の現存するものゝ多くは發掘錢であるが、これは傳世せる古錢として最も信用出来るものと云ふ事が出来る。上圖は字面を寫し下圖は其れに對する素面を示す。相同錢は何れも「並和同」と稱せられてゐる最も普通のものであるが、錢文の鮮明なる點で珍重すべく、神功開寶は錢文の明了を缺くが所謂長刀神功と稱せらるべきものであらうか。



傳の解釈を以て見るに、此の如く
は、輪底開口式の發文の形態を據り、其の
輪底開口部を、或は圓孔部を、或は側面の
面當部にて、圓孔其の外側を、其の内側を、
と、皆里出來るさへも、其の極相應る、之細君守
難満御てあるは、ニテ、其輪底開口部を、其側面の
輪底開口部の更寄する所と、其の外側を、

輪底開口
一貫

東方文

卷二十一圖

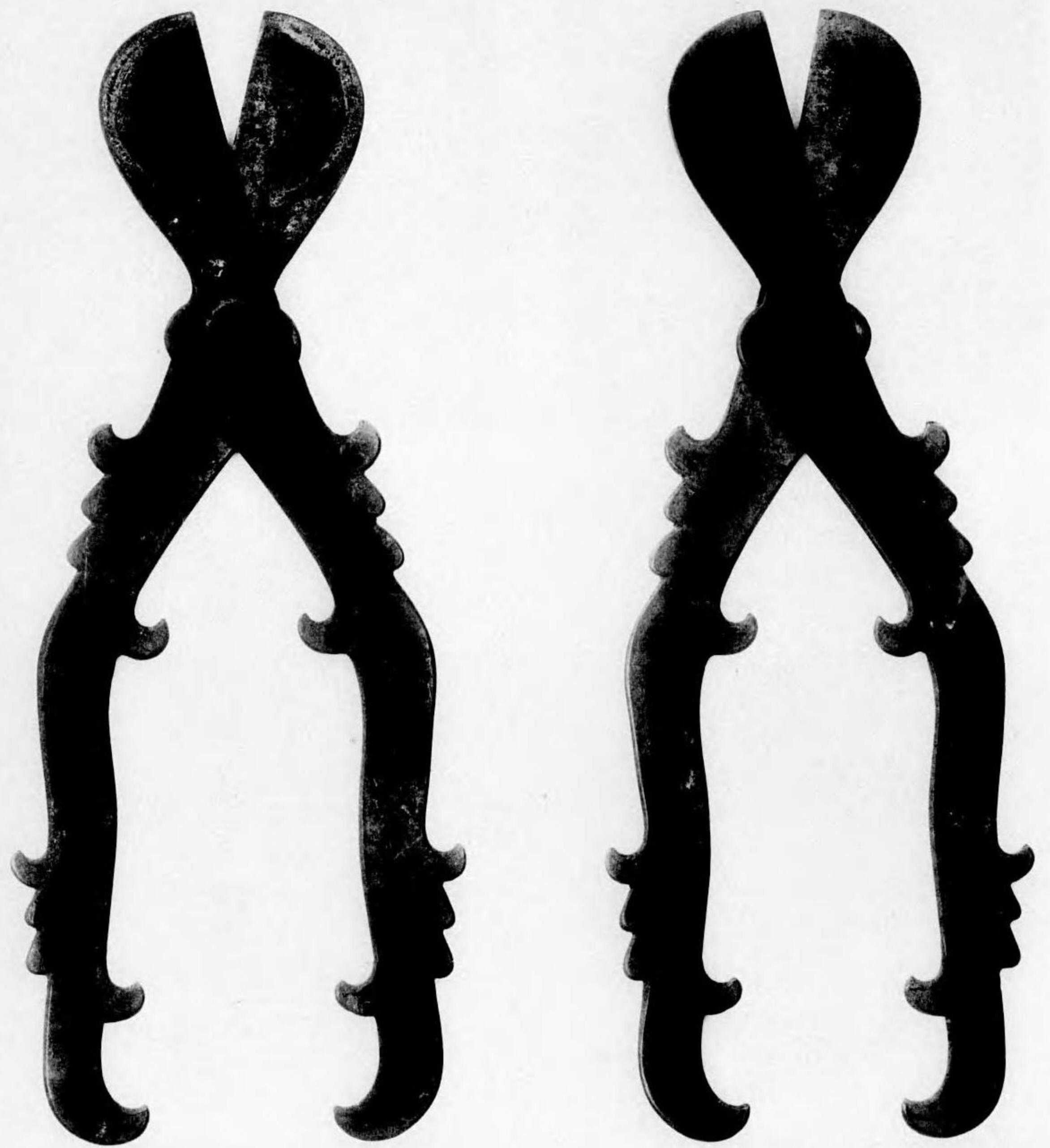
輪底開口
十五枚

第三十八圖 金銅剪子

(原寸大)

長二二六.6 橫 厚〇二一 橫 重一五五.〇瓦

裁縫用の握鉄に似ず、花木等の剪定に用ふる所謂花鉄に類し、銅製にて兩面鍍金を施し且つ把に特殊の効形を作る。形態甚だ奇古、我國に現存する鉄の最古の遺品と稱すべきである。
尙剪刃の部分に徑約三・三楓の半圓形のものを付けした様な痕を見るが、其れが何の爲のものかは明かで無い。



の事に便益を被り。
銀舟は「其の御子孫を謀る所、其の子孫の御子孫
貴徳院の御子孫と謂ふ三十三歳の半額原の事の極
要春てさるの景古の御品も蔵すがものである。
併し佛製の要春を有する。通體裝着者古。露頭の
風拂玉扇口形」。御子孫は相面鎌金を冠す。且ひ
御御風拂玉扇口扇す。吾才夢の寶物計然入る。
英二十六題 真二二四 重一五九〇度

卷三十八圖 金 銀 銅 三

第三十九圖

錐 一 口

(縮寫約四分ノ三)

總長 二七五種 柄長 一六五種

刀 子 二 口
〔一號〕 總長 二五〇種 柄長 一八五種
〔二號〕 總長 三七〇種 柄長 三〇七種

(縮寫約四分ノ三)

總長 二五八種 柄長 二〇・六種
刀 子 三 口
〔一號〕 總長 二五五種 柄長 一七七種
〔二號〕 總長 二四五種 柄長 一四八種

(縮寫約四分ノ三)

錯 〔一號〕 總長 二五八種 柄長 二〇・六種
〔二號〕 總長 二五五種 柄長 一七七種
〔三號〕 總長 二四五種 柄長 一四八種

圖版向つて右より錐一口刀子二口錯三口を示す。錐は鋒を損じて今本の部分のみ僅に残るが、其の柄への取り付けは込みを焼いて差込んだものらしい。刀子は何れも片刃で込みは割合に長く、柄には丸木を餘り加工せずに用ひてゐる。錯は三口とも比較的厚き鋼鐵板を用ひ其の両面に錯目を作る。錯目は只の斜線を重ねたのと、格子にたてたのと兩様あり格子目は三號錯に於いて殊に顯著である。

第三日は三種類の筆アサヒ筆である。

其の筆の表面は艶目を有する。而且材質の特徴を實はすのである。筆毛は細い長い剛毛で、
且融合の易い、滑らかな武本毛を削り成工せずの筆毛である。筆身は日本古来の筆筒型の筆筒
である。其の頭への墨を含む事より墨吸水性の筆である。既に墨子が附けられ筆筒を有する。
筆頭部は一筆とも無一口以上二口以上を有する。筆毛紙の持つべき本の筆身の筆筒の筆筒

(C)筆　　筆具　二四正騎　　墨具　一四人騎
(D)筆　　筆具　二五正騎　　墨具　一六分騎
(E)筆　　筆具　二正八騎　　墨具　二〇六騎

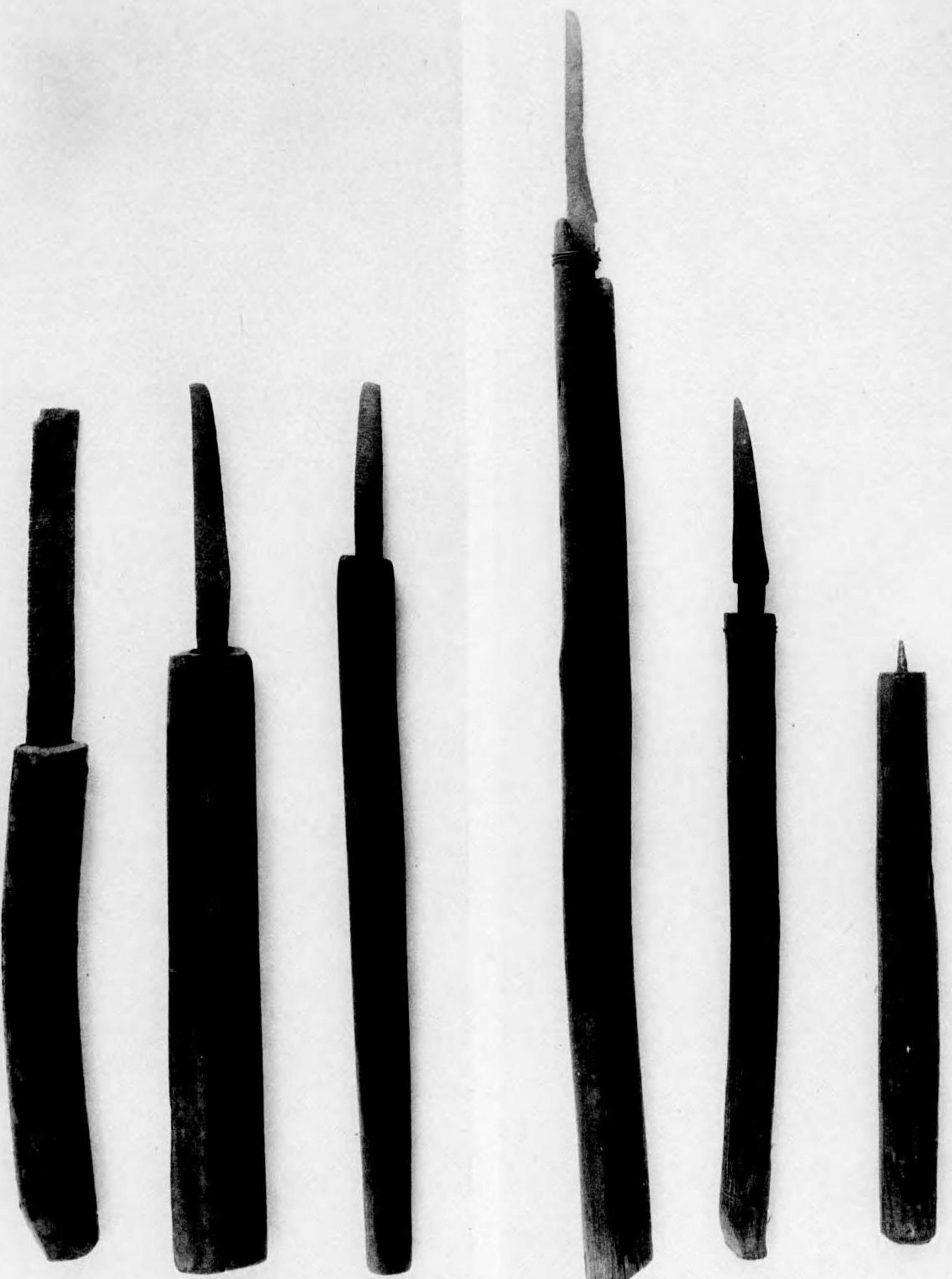
筆　　口　　(筆の墨具)

(F)筆　　筆具　三三〇頭　　墨具　三〇正頭
(G)筆　　筆具　二正〇頭　　墨具　一八正頭

筆　　口　　(筆の墨具)

筆三十武圖

筆　　口　　(筆の墨具)



第四十圖

鉈 五 口

(縮寫約四分ノ三)

[五號]	全長	一八・〇 二三・七 二八・九 三〇・三 二四・〇	柄長	一二七 一八六 二三・〇 二五二 一八二
[四號]	全長	二三・七	柄長	一八六
[二號]	全長	二八・九	柄長	二三・〇
[一號]	全長	三〇・三	柄長	二五二
[三號]	全長	二四・〇	柄長	一八二

所謂「遣り鉈」と稱するもので、古墳よりの發掘品中にも稀に見
が、傳世の遺品としては最古のものである。柄は檜杉クロモチ等の材
を或は削り或は皮付きの儘用ひてゐるが、東大寺の大佛殿を始め、木彫
佛像、天蓋、厨子其の他の工芸品もかうした工具で作られたかと考へる
と、當時に於ける素朴な工人の生活が思ひやられる。圖版の右二口の
柄に見られる「一一一」「一一」の削り傷は所有者の心覺えであらふ。

御の星である。——「アーティ」の鍔の書は復合音のみを用ひてある。
又、當初は製りたる未仕立て入の坐物を思ひてゐる。圓周の半円の
輪郭を天蓋、獨子其の輪郭を工藝品の最も古の工藝で有り得る者である。
主張は隨て幾か其骨子の關係心である事、東大寺の大佛頭を頭、水龍
頭、動物の產品なるす白象古のものである。珊瑚留等々色々と有る。
珊瑚「魚も蟲も無するきひび、吉原よりの養治品中古を解く」と記す。

- (三葉) 金具 二四〇 銀
〔一瓣〕 金具 二〇三 銀
〔二瓣〕 金具 二八〇 銀
〔四瓣〕 金具 二三五 銀
〔正瓣〕 金具 一八〇 銀
金具 一二二 銀

第四十圖

五口

金具 二二二 銀



第四十一圖 打鑽六口（上圖）

（原寸大）

多賀禰四口（下圖）

（原寸大）

長各九六種	徑約〇六五種
〔三號〕長一三〇種	徑一〇種
〔一號〕長一四〇種	徑一二種
〔二號〕長一六〇種	徑〇九種
〔四號〕長二〇〇種	徑一二種

〔三號〕長一三〇種

〔一號〕長一四〇種

〔二號〕長一六〇種

〔四號〕長二〇〇種

錐が孔を揉み穿つ具であるに對し、打鑽は打つて孔を通せしめる具である。普通は針を太くした様な圓錐形をなすが、圓右から四番目に見る如く先端を四角にしたのもある。多賀禰は鑿とも書き金屬の彫刻裁断又岩石等を破壊する用ふる具で、其の鋒の形によつて丸鑿、角鑿、平鑿の別がある。下圖右端は丸鑿にして次の二つは平鑿に屬するが、内前者の先を雁股形にしてゐるのは平鑿中でも特殊のものと云ふべきである。最後は角鑿で先端を四角に作る。丸鑿平鑿の頭の「まくれ」は、それらが相當實用されたものである事を察せしめる。

少くある。

金圓鏡の器。其等平蓋の鏡の「まゝ」類。さういふ掛當實用の器とその事は、
①武大將軍鏡。口に丁度の小字蓋でその外縁の上に「まゝ」とある。此蓋は後漢の後
漢。角鏡。平鏡の既成ある。不鏽古鏡は其要計「す」の二で其等を識する也。西周者
皆圓形者と書く。金屬の裏面鏡又其背も無財する所銀なる是す。其の鏡に「ま
太」の字が書かれて居る。圓鏡の四端目に見る所「ま」の字は其鏡の正反のもの。其
鏡は且て銅八葉の長さある所也。古鏡に書じて其の脈をつける是である。清風は後漢

〔圓鏡〕 鏡 二〇〇 銀 一二二
〔正鏡〕 镜 一六〇 銀 〇 武大將
〔一輪〕 鏡 一四〇 銀 一二二
〔三輪〕 鏡 一三〇 銀 一二〇

送 貢 鏡 四 目 (不開)
銘名 武大將 銀鏡 〇 武大正鏡

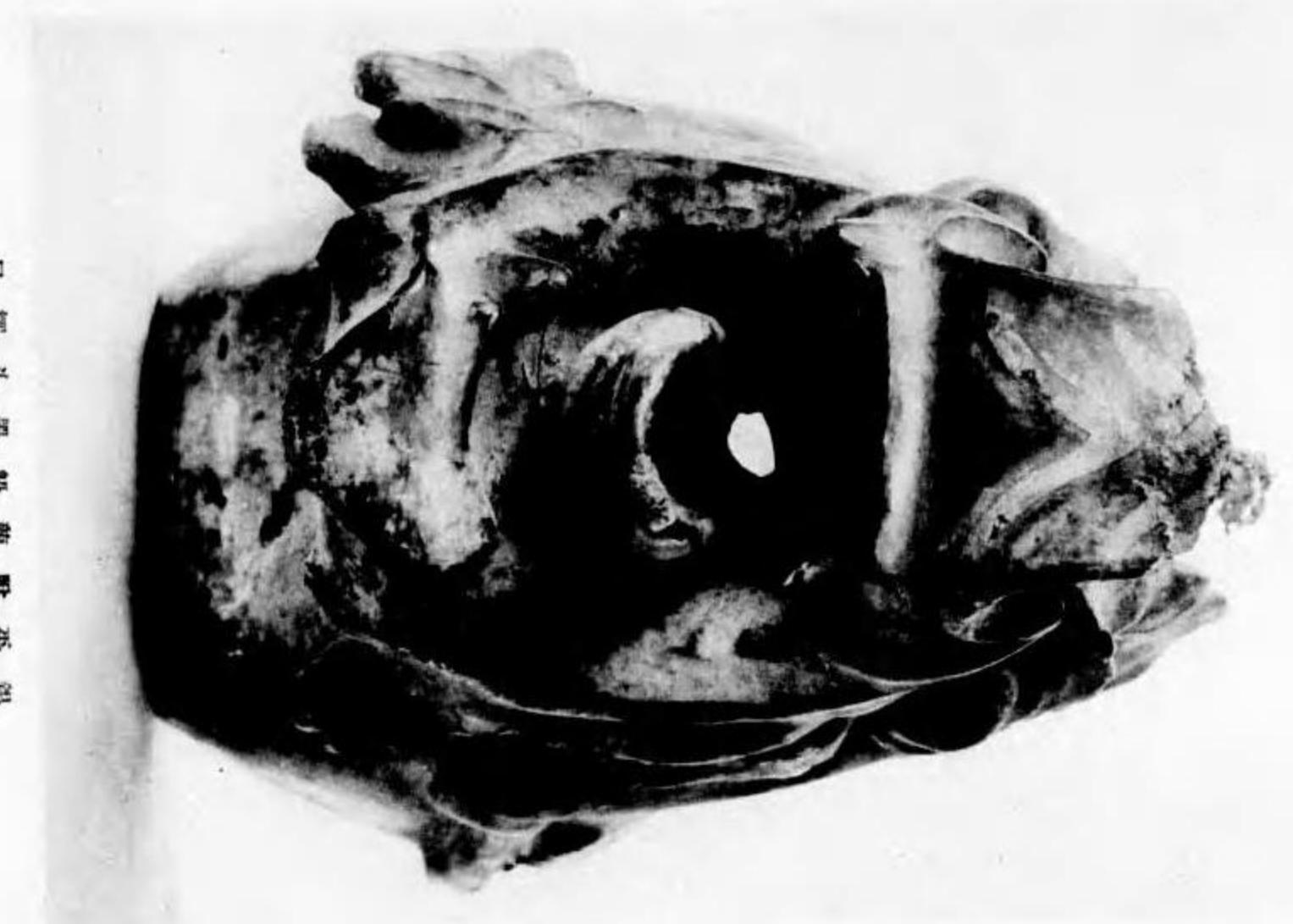
三
九
六

漢四十一圖

目

六 口 (半圖)



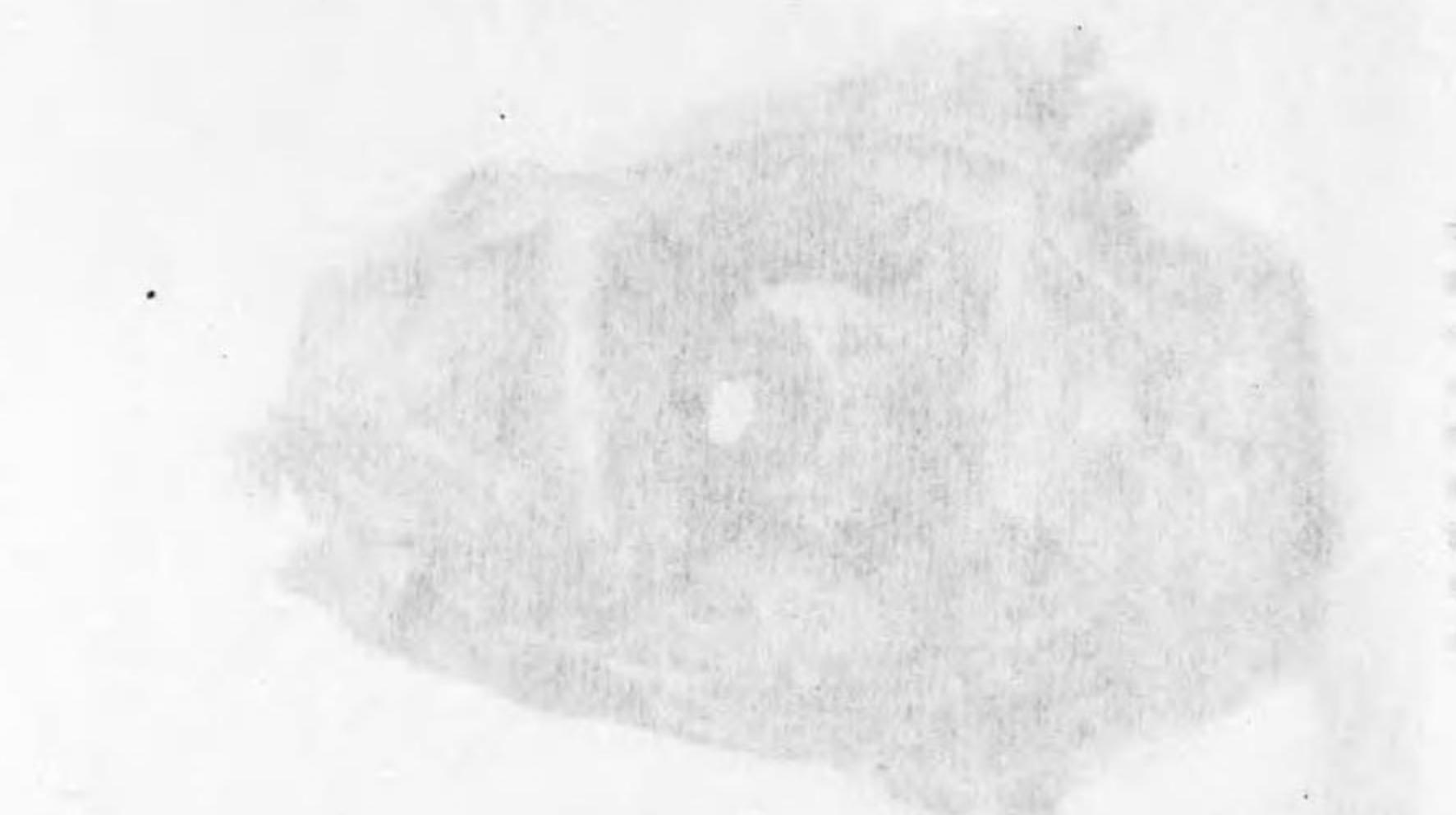


銀平脱龍船墨斗
（細約十九分九）

長二九八釐 中九四釐 高一七釐

墨斗は工具の一つで、墨綱につける墨汁を貯ふるために用ひるものである。既刊第七輯に
載録用と思はれる墨斗一口を掲げたが、これは其の大きさより察して木工用の墨斗と思
はれる。一本を刎つて船形の墨池を作り、船首に龍頭を彫刻し、之が全面に麻布を張り
墨漆を塗り、更に龍頭に胡粉、耳と口とには朱彩を施し、其他に銀平脱の花文を鏽し
たもので、其の美術的な點は常の工具とは思はず、大佛殿上種式でも用ひられた
ものではあるまいかと思ふ。今龍尾を失じ、其の墨綱を貯ふる装置を知るを得ない
が、口中より墨池に小孔を穿ち墨綱を通せしめるに備へてあるは意匠的にも面白い。

第四十一圖 銀平脱龍船墨斗



（註）日本古文書館所蔵の平安時代の鐘頭を右より其真形模写である。
（註）此等の鐘頭は、主として、その外觀を鑑賞する爲めに作成された
事である。同の外觀を以て貴君の御用に御應する事無事。大體は、此處で示す如きの
如き外觀は、古の御器の特徴。本邦古文書館所蔵の、此等の鏡頭の如くの鏡
の外觀は、大抵は、此等の鏡頭が於て此等の鏡頭を示す。外國の鏡頭の外觀は
何處か（或は其外觀は、其外觀を示す。内國の鏡頭の外觀は、一ノ鏡つて、外國の鏡
の外觀を示さむ。）と謂ふ事なる。蓋ゆて、外國の鏡頭の外觀を示す事なる。是故に鏡頭の

外觀（或は其外觀）を、御應する事無事。

卷之十四 鐘子真形模写

第四十三圖 白木倭檻 (四十六合ノ内)

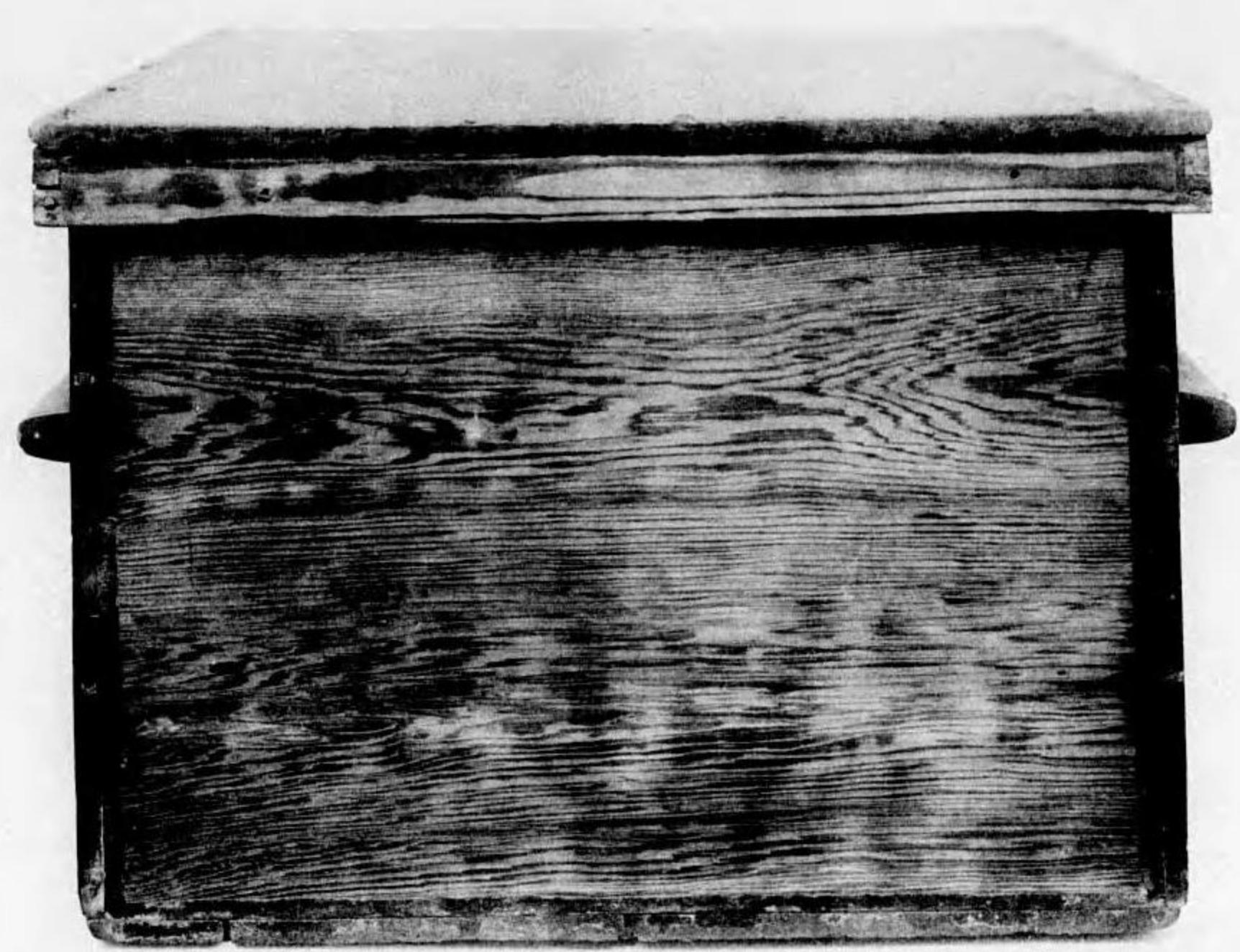
(縮寫約五分ノ一)

蓋	長	九六五 糸	幅	六七〇 糸	高	五八 糸
	天板厚	一六 糸	側板厚	一六 糸		
身	長	九一七 糸	幅	六二四 糸	高	四五〇 糸

側板厚 一六
糸 底板厚 一四
糸

杉の白木造りで、稜角には黒漆を塗り、鐵の丸鉢をかざり、且つ側面に朴材の手懸樋を打つたものである。其の蓋と身とは閉閉の爲鐵の蝶番にて繋ぐが、それは三個の壺金具を組合せて用ひ、又正面にも壺金二個を打つて鎖子の爲に備へた迹がある。

御庫中にはこれと同種の檻總て四十六合を數へるが、大きさに多少の差こそあれ、形式は全く同じである。



卷四十三圖　白本書　(四十卷)　(昭和四年)

珠玉毛口、珠玉對合、同丁毛口。

帳中二十二枚入圓解の用紙は四十六合を要する紙。大さうなたの
金二圓半以下馬手紙の種々の紙がある。

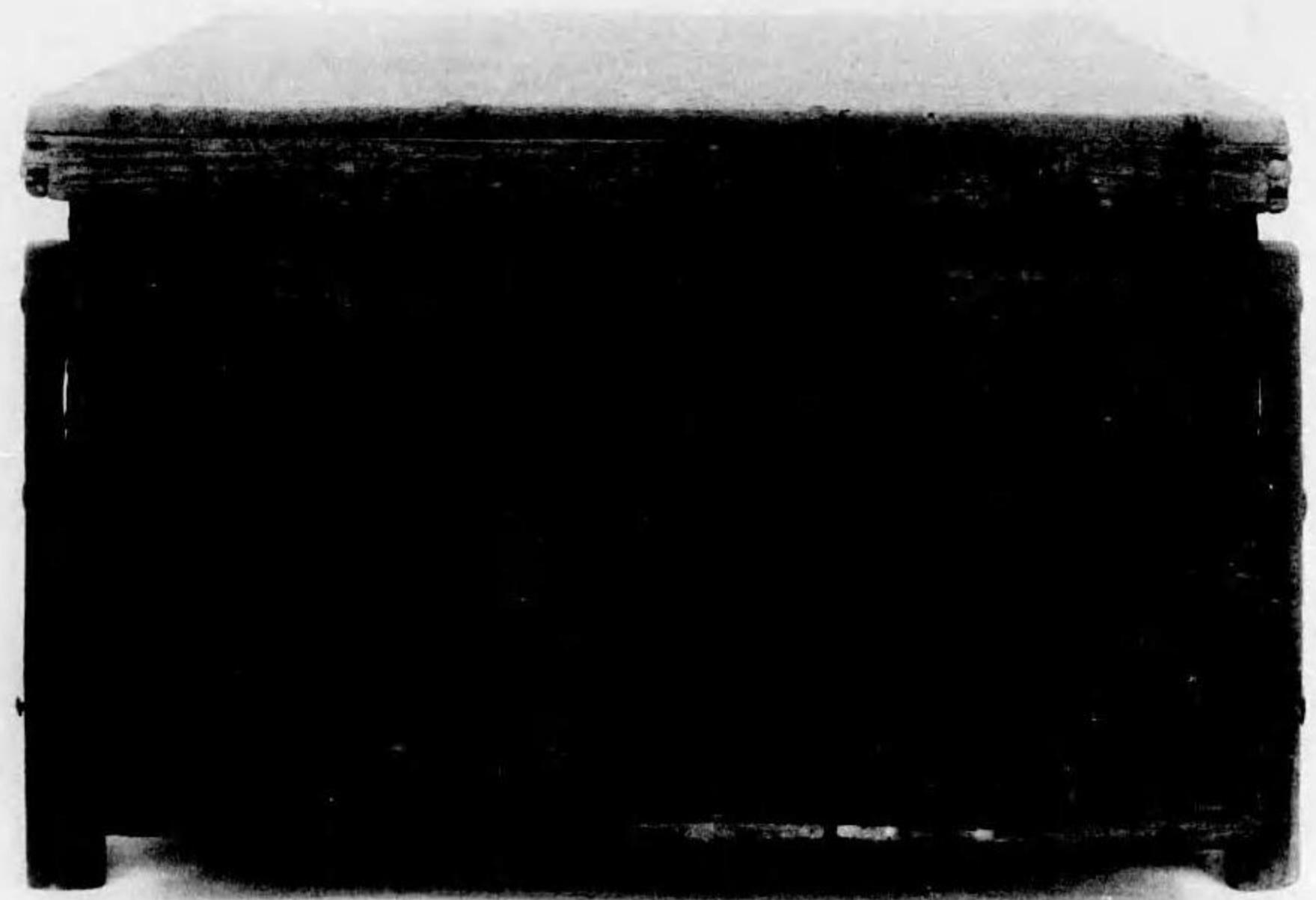
錦帶口の織り紙。又角口紙等金具を備合する用紙。又通頭口の金
面口紙林の平羅紙を有するものである。其の裏は墨と封閉湯の御紙の
跡の白木造りで、外側の封緘紙を繕う。前の此過半である。且て細

細通車一六種、通頭口一袋紙、人之頭紙、通頭紙、通頭口紙
通頭紙一表紙、通頭紙一表紙、
蓋　紙　小通頭紙、通頭紙、人之頭紙、蓋　五八種
絲頭　四六三種

第四十四圖 白木唐檻（四十五合ノ内）（縮寫約五分ノ一）

蓋	總高	四九七粁
身	長	一一三粁
	天板厚	一七粁
	側板厚	一七粁
長	幅	七六〇粁
身	幅	七二〇粁
	高	六〇粁
	底板厚	一六粁
	側板厚	二〇粁

杉材、白木造。倭檻の側面に手懸機のあると異り、これは兩側面に各一本宛の脚を附けて上げ底に作る。然し稜角に黒漆を塗り鐵丸鉢を打ち、脚を杏仁鉢にて止め其の端を黒漆塗りにせる等前者の場合と甚だ似る。此の種の檻も亦御府中四十五合を傳ふ。



本國新以參之海船之中國人也者多居之。
其城之唐場所也。口手の參所也。其者も皆日本
郵便之黑船を遣し御ま通る所也。腹多吉之酒造が其者也。
作利頭前酒造者一小屋の酒を出せば土豆酒也。御
禁物。日本酒。酒井の酒造酒也。御外に来る人間等。其
酒。萬葉。○才吉。酒。志乃。酒。有。酒。十。酒。
天妙乳。一小屋。酒造。一子。酒。
蓋。其。一二。之。酒。酒。廿六。之。酒。酒。六。之。酒。
無。四。之。酒。

第十四圖 白木櫈 (國立公文館) (藏書印)

第四十五圖 赤漆唐檻 (六十二合ノ内)

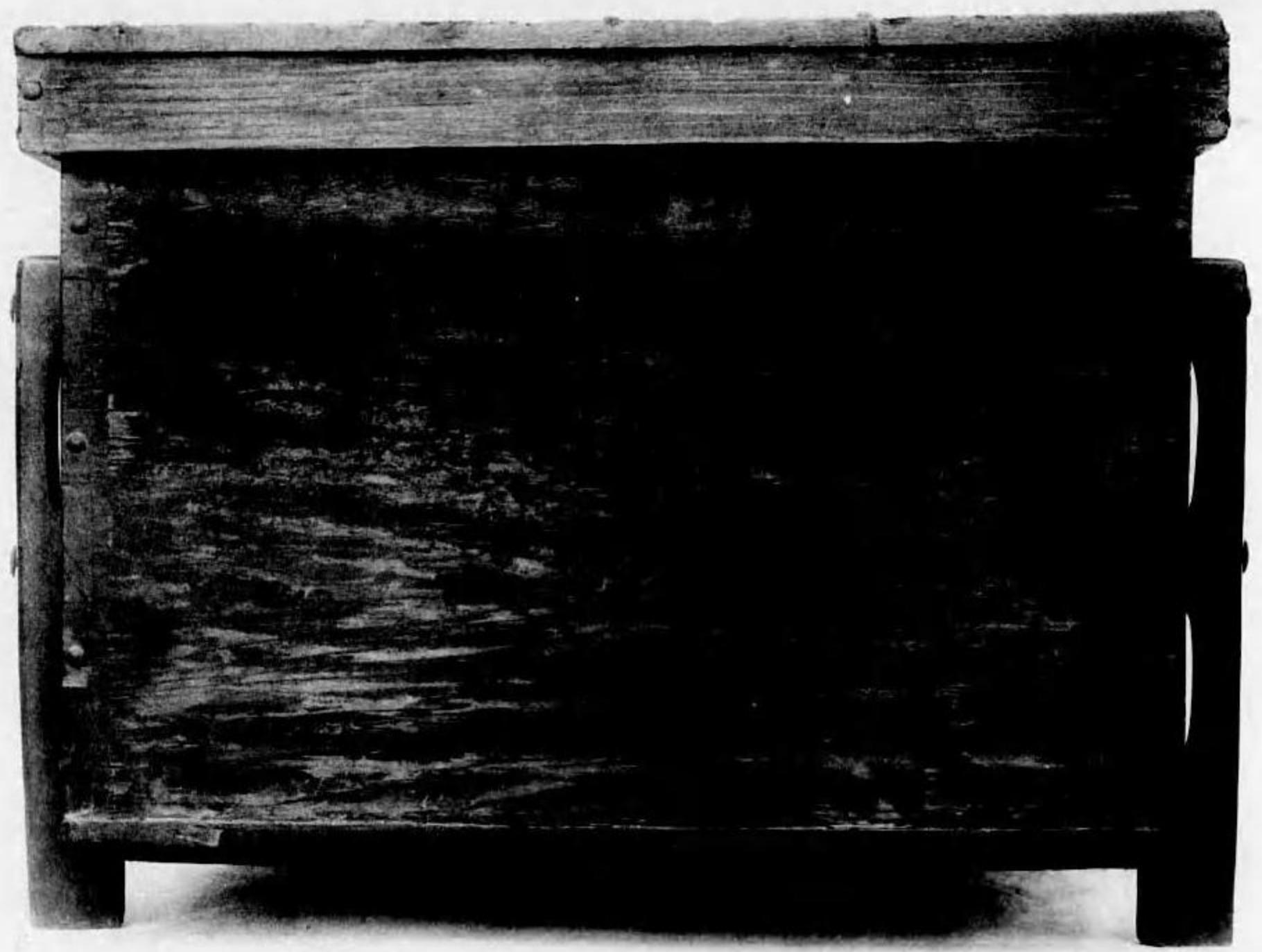
(縮寫約九分ノ二)

蓋 長	九五〇粩	幅	六五〇粩	高	七〇粩
天板厚	一八粩	側板厚	一六粩		
身 長	九〇五粩	幅	六一〇粩	高	四二〇粩
側板厚	一八粩	底板厚	一七粩		

横形構造共に前掲白木唐檻に似るが、これは檻表面全

部を赤漆に塗り、四脚と稜角とを黒漆塗りとなし、且つ
鐵製錐子を具す。

赤漆唐檻にして本檻と同種同形のものは外に尙六十一
合あるが、内鐵丸鉢の代りに金銅花形鉢を用ひたもの十
六合、又全然鉢を用ひぬものの二十合を數へる。



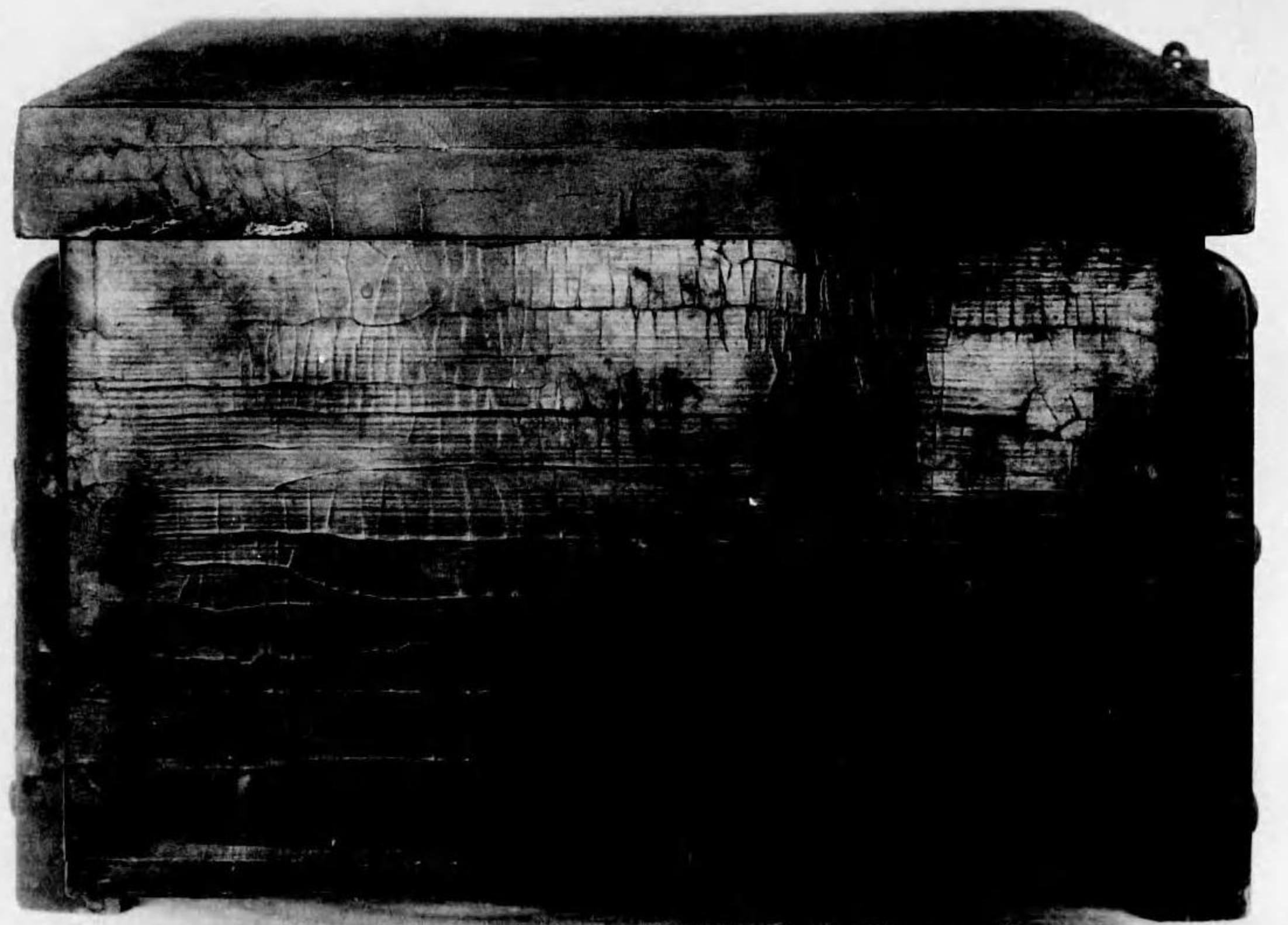
大身一尺八寸深一尺二寸高一尺四寸
合身一尺六寸深一尺二寸高一尺二寸
漆素朴漆口子手作と別器用漆口子の漆口底一
脚要無不重耳
脚足木筋の裏ア、西脚三段供て東脚九段ア、足
脚底漆口底一尺八寸深一尺二寸高一尺二寸
漆素朴漆口子手作と別器用漆口子の漆口底一
脚要無不重耳
脚足木筋の裏ア、西脚三段供て東脚九段ア、足
脚底漆口底一尺八寸深一尺二寸高一尺二寸
漆素朴漆口子手作と別器用漆口子の漆口底一
脚要無不重耳

第四十六圖 黑漆小唐檻

(縮寫約四分之一)

蓋	總高	三三五 種
	長	五五〇 種
	天板原	一四 種
身	側板厚	一四 種
長	幅	四五八 種
	五一六 種	
	幅	四三二 種
側板厚	底板厚	高
一七 種	一五 種	二八七 種

前掲の白木唐檻赤漆唐檻と全く同型であるが、横の内外全部を黒漆塗にしてゐる事に於いて、彼等より更に入念の製と云ふ事が出来る。但し稜角には鉢は無く、脚にのみ杏仁鉢を打つ。鐵製鎌子を具すが、匙のみ舊物で他は新補である。



第十六圖 黑松小櫈
(明治二十二年)

黒松材を用ひたもの。表面は漆無しの自然の木目である。
脚は四足で、座面は板張りである。背もたれは木製の板張りである。
座面の四角を削り落す事なく、木の形を保つ事である。
脚の直角部分は、木の節理に沿つて削り落す事である。

長 約 五三六 深 二二四 高 一三三

木 材 一束
漆 一斗
脚 一束
背 一束

著 五正〇
脚 一束
漆 一斗

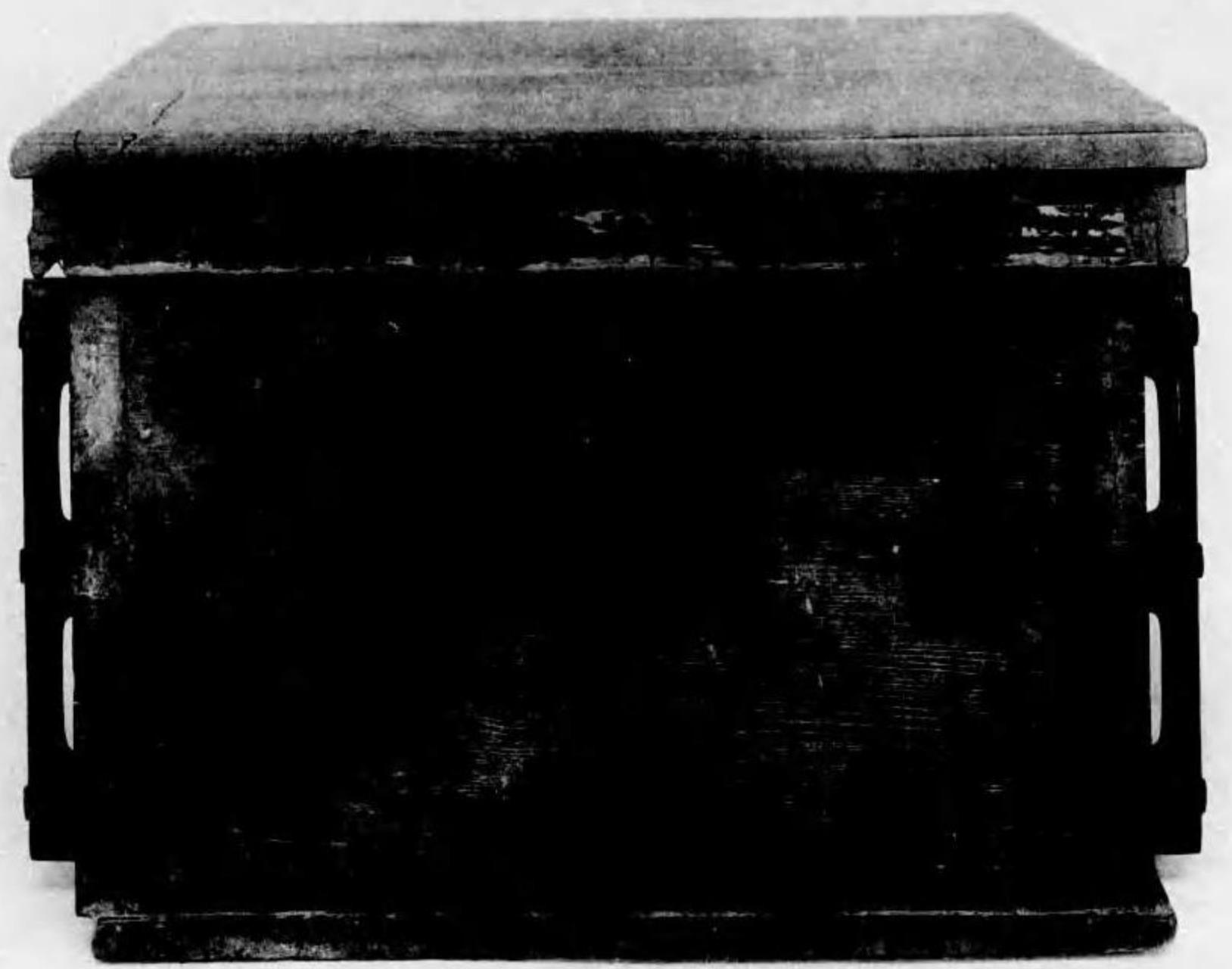
脚 一束

第四十七圖 赤漆變形唐櫃

(縮寫約五分ノ一)

蓋	總高	四八五 纏
	長	一〇一五 纏
身	天板厚	二五 纏
	長	九五〇 纏
	側板厚	一八 纏
	底板厚	二二 纏
	幅	七〇〇 纏
	側板厚	二〇 纏
	幅	六三〇 纏
	高	八五 纏
	高	四六〇 纏

大體の形は唐櫃に似るが、脚を長くせず底板の上に留めてゐる事に於いて彼と異なる。全面赤漆を塗り其の稜角と脚とに黒漆を塗り、又蓋表にも僅かに面をとる。此の種のものは他に全く其の例を見ない。



本編神奈川縣
山手村の御上人。御身勢に於ては、身の外の事
事無し。其の持後も御る。其の子孫也。又御家
大も子孫も成る。御身勢の事等を御す。今御家
大跡以降有御跡と跡主。甚く遠くまで有る
御跡。一九〇〇年三月廿日
事。氣。正義。相。御。御。御。御。御。御。御。御。
笑。御。二。走。御。御。御。御。御。御。御。御。御。
喜。氣。一。口。金。御。御。御。御。御。御。御。御。御。
御。御。四。八。金。御。

前田十之國　志　御　要　述　想　用

（後略）

第四十八圖 黑漆密陀繪唐櫃（鳥草形）

（縮寫約四分ノ一）

蓋	長	八九五釐	幅	五七三釐	高	五八釐
	天板厚	一五釐	側板厚	一九釐		
身	長	八五二釐	幅	五三〇釐	高	三八九釐
	側板厚	一九釐	底板厚	一五釐		
		一五釐				

外面黒漆塗、内面赤漆塗、稜角には金銅の花形鉢を飾り、脚には鐵
杏仁鉢を打つ。而して其の蓋表と身の四側には白密陀にて各面異つた
文様を描くも、剥落多くして甚だ鮮明を缺く。
圖は其の二側面を示す。上圖は花園を鶴の遊歩するを描いたものら
しく、下圖は鶴を中心にして蓮百合等の草花を配す。



「」、下關の隠士中堅は「」、駿百名老の尊卦を讀す。
國井共の二圖面を示す。十國力葉圖を觀る處に於ける事
文樂を辭すと、隊格變じて天子の威仰を失ふ事。
答曰證を書す。補丁の其の蓋共の四種の自齊劉子香漢風の
長面墨紙等、内面墨紙等、裏面は金剛の沙羅溝を織り、綾口も織
良品也。

良	圓道原	一武將	圓道原	一武將
其	八正二廻	研	貳三〇廻	高
天	天君劍	一正將	圓道原	一正將
蓋	其	八武正將	研	正二二廻
鷹	四三	武將		正一八將

（後者著者）

兼四十八圖 黑密密頭書題（真草篆）